

平成14年度
ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉川大学・玉川学園女子短期大学

大学FD委員会

無断転載を禁じます。

目 次

はじめに	1
これまでのFD活動への取り組み経過と今後の計画	
1. 大学FD委員会	3
(1) 経過	3
(2) 委員会の目的	3
(3) 学部におけるFD活動との関係	3
(4) 活動内容	4
(5) 委員構成	5
(6) 今後に向けて	5
2. 学部の活動	6
➤ 文学部	9
➤ 農学部	10
➤ 工学部	11
➤ 経営学部	16
➤ 教育学部	18
➤ 芸術学部	20
➤ 女子短期大学	21
教員研修	
1. 天城研修	24
2. プレゼンテーション研修	27
(1) 実施の概要	27
(2) 実施の状況	27
(3) 実施後のアンケートから	29
プレゼンテーション研修のしおり 受講のご案内	32
3. 新任教員研修	43
参考資料	
1. 大学FD委員会規程	47
2. 大学FD委員会の議事要旨	49
3. FD活動の推進(「玉川大学のFaculty Development」)	66
4. プレゼンテーション研修アンケート用紙	74
5. 各学部におけるFD活動についての実態調査(平成14年5月31日現在) ...	75
6. 各学部におけるFD活動についての実態調査用紙	84

はじめに

本学の組織的・継続的なF D活動の歴史はまだ浅く、F Dという言葉を用いての具体的な活動は平成 11 年度から学部を中心に主体的に行われてきました。全学的な見地からのF D活動が必要であるとの考えから、平成 14 年 4 月には、大学F D委員会を暫定的に立ち上げ、その意義や目的、役割を明確にし、各部の協力を得ながら各種の活動を行ってきました。

いうまでもなく、本来F D活動は他者から強制されて取り組むべきものではなく、大学の教員は自発的に高度な教育研究を目指して、絶えず自己の能力の開発・向上に努めているべきものです。少子化の時代、大学間競争の時代、教育の質の保証の時代だからということではなく、常に特色のある、質の高い教育を学生に提供することが基本であることは、いまさら論を待たないことです。本学もこれまでに高い目標を掲げて教育の質の向上を図ってまいりましたが、F D活動を通して、全教員がより高いレベルの教育研究活動ができるよう支援していく所存です。その一環として、平成 14 年度の本学におけるF D活動を報告書としてまとめましたのでご活用いただければ幸いです。また、平成 15 年 4 月からは、大学F D委員会を正式な委員会として位置付け、より本格的に推進していきますので、今後も皆様のご理解とご協力を賜れば幸甚です。

大学F D委員会委員長
教学部長 後藤 昌彦

これまでのFD活動への取り組み経過と今後の計画

1. 大学FD委員会

(1) 経過

平成11年度に文学部外国語学科の教員有志が「学生による授業評価」を実施し、報告書をWeb上で公開した。また、工学部では教育方法改善検討委員会を設置し、1年生の学力調査や全学生の学生意識調査、教室の教育設備の改善等を行った。さらに、平成12年度秋学期から工学部が「学生による授業評価」を試行的に実施し、以後継続的に実施している。女子短期大学では、平成13年度に授業評価に関する項目を含めた学生生活全般に関するアンケート調査を実施した。

このように、本学におけるFD活動は学部を中心に活動を展開してきた。しかし、学部の活動として限界があるものや、全学的な観点からの取り組みが必要な事項等を取り扱うための組織が必要であることから、平成14年4月より暫定的な大学FD委員会を発足させ、各学部の協力を得ながら具体的な活動をはじめた。

(2) 委員会の目的

本委員会は、大学教員の教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的としている。また、FD活動を行う目的を以下のとおり明確化した。

- ① 玉川の教育理念を実現するため。
- ② 大学大衆化時代に対応するため。
- ③ 競争優位性を確保（受験生の大学選択等）するため。
- ④ 21世紀の玉川教育を支える教員の育成。

(3) 学部におけるFD活動との関係

第2回大学FD委員会において、大学FD委員会と各学部FD委員会との位置付けや関係を明確にしておく必要があることから、以下のとおりその関係を整理した。

区分	大学FD委員会	各学部FD委員会
委員会の目的	1. 全学にまたがる教育活動の改善について審議・研究し、その啓蒙活動・広報活動・環境整備などを行う。 2. 全学的な視野でFDに係る調査・研究・審議を行い、各学部の教育改善活動が組織的に活発に実施されるよう支援する。	1. 教育改善活動を組織的に推進するための方策を審議する。 2. 学部長の指示に基づき教育改善活動を実施する。

区分	大学FD委員会	各学部FD委員会
具体的な活動内容	1. FDに関する啓蒙活動 (冊子等の作成, 講演会, 広報誌等の作成) 2. 教員の職責に係る啓蒙活動 3. 教授方法の研修会(プレゼンテーション研修会) 4. 教員の教育活動に関する総合的評価方法の検討 5. 新任教員の研修 6. 学外の教員研修会等への教員派遣(参加) 7. 全学共通科目の学生による授業評価の実施 8. 全学をまとめたFD活動報告書の作成	(学部での活動例) 1. 学生による授業評価(学部で実施) 2. 学部独自のFD広報誌の作成 3. 授業評価報告書の作成 4. 新任教員への学部教育ガイダンス 5. シラバスの検証 6. 研究授業の実施
連携会議体等	教育研究活動等点検調査委員会での報告 大学部長会, 教務委員会	大学FD委員会へ報告・調整 主任会, 学科会, 学部教授会
事務主管	教学部, 教育調査企画部	各学部
予算	大学共通予算(14年度は計上なし)	学部予算

(4) 活動内容

主な活動内容としては以下のとおりである。大学FD委員会は6回開催したが、詳細として巻末に参考資料(議事要旨)を掲載した。プレゼンテーション研修は5回開催し、合計59名(全専任教員の17%)の教員が参加した。

<平成14年度>

5月9日	第1回委員会
6月21日	第2回委員会
7月22~23日	第1回プレゼンテーション研修の開催
7月24~26日	「天城セミナーAグループ」に大学FD委員会全委員が参加
7月29~30日	第2回プレゼンテーション研修の開催
9月17日	第3回委員会
10月31日	第4回委員会
11月6~14日	「玉川大学のFD」冊子を全学配布
12月18日	第5回委員会
12月19~20日	第3回プレゼンテーション研修の開催
3月6日	第6回委員会
3月17~18日	第4回プレゼンテーション研修の開催
3月19~20日	第5回プレゼンテーション研修の開催
3月24日	新任教員研修会(下記日程の欠席者対応用)
3月27~28日	新任教員研修会

(5) 委員構成

委員等	所属	氏名
委員長	教学部長	後藤昌彦
副委員長	農学部	松香光夫
委員	文学部	藤田裕二
委員	工学部	山本庸介
委員	経営学部	菊池重雄
委員	教育学部	佐藤隆之
委員	芸術学部	林卓行
委員	女子短期大学	中村慎一
アドバイザー	学術研究所	切田節子
事務担当	教学部	稲葉興己
事務担当	教育調査企画部	齊藤文則

(6) 今後に向けて

平成15年度からは大学FD委員会の学内における位置付けを明確にし、同時に規程を制定することを検討している。また、平成14年度実施のプレゼンテーション研修会、新任教員研修会は今後も継続的に実施し、平成15年度以降は外部講師による講演会、教員による授業評価、FDに関する各種研修（国内外）への教員派遣、サバティカル制度、ホームページの開設等を検討していきたい。

本来FDは自発的に取り組むべきものであり、他者から強制されるものではないが、将来的には自発的・積極的に取り組みやすくなるような、FD活動のための環境整備を充実させていきたい。

2. 学部の活動

平成 14 年度における各学部 F D 活動の状況を一覧にする。

	各学部の 構成人数	各学部の 開催回数	学生による授業評価の実施		プレゼンテーション 研修会への 参加者数
			実施回数	教員の参加率	
文学部	2名	—	1回	25.8%	10名
農学部	6名	3回	2回	42.1%	10名
工学部	6名	7回	2回	41.3%	8名
経営学部	23名 (全員)	8回	1回	34.0%	9名 文学部英米文学科 国際経営コース 1名を含む
教育学部	11名	2回	1回	17.0%	7名 文学部教育学科 3名を含む
芸術学部	4名	1回	1回	92.9%	7名
女子 短期大学	5名	2回	1回	22.9%	9名

※教員の参加率の算出には、専任・非常勤を含める。

■今後（平成 15 年度～）の計画について、一覧にまとめる。

	今後の計画
文学部	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今年度から 3 学科体制になるので、学科相互の連携をはかっていく予定である。 ・ 学生によるアンケート調査を全学科で行っていく予定である。 ・ 学外の F D 研修会，研究会にも積極的に参加していく予定である。
農学部	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全学委員会と協調して，プレゼンテーション研修会，学生による授業評価の継続的な実施をする。 ・ 農学部 F D のあるべき姿を討議し，農学部の路線を明確にする。 ・ 大学 F D 委員会が作成したパンフレットに基づいて，F D 概念の啓蒙・進行ステップを明らかにする。また，その実施をする。
工学部	<ul style="list-style-type: none"> ・ 基本的な進め方 基本姿勢 1：今までの活動を，淡々と推進する。 基本姿勢 2：今までの活動を F D の枠組みの中でもう一度見直し，推進する。 (F D 提案計画書，効果評価書) ・ 具体的な施策 1：F D 研修会を実施する。 ・ 具体的な施策 2：教育方法改善を実施する。 <ul style="list-style-type: none"> ① 学生による授業評価を継続する。 ② 学生の自学自習の啓蒙活動をする。 (実体調査，自己点検ニュースの特集，講演会の開催，教員の教授法，学生への啓蒙)。 ③ 学生の付加価値の上げ方，測定方法について検討する。 ・ 具体的な施策 3：研究の活性化をはかる。 ・ 具体的な施策 4：学生の勉学環境の改善をはかる。 ・ 具体的な施策 5：入試志願者の増加対策をはかる。
経営学部	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第 2 回経営学部教員研修会の開催をする。(7 月または 8 月) ・ 第 3 回経営学部教員研修会の開催をする。(3 月) ・ 学生による授業アンケートの実施をする。(春学期・秋学期) ・ 国内外の F D 関連会議への参加・発表を行う。 ・ 授業内容を調整するための関連科目授業担当者ワークショップの開催をする。 <ul style="list-style-type: none"> ① 経営学関連科目グループ ② 国際文化関連科目グループ ③ 社会科学関連科目グループ ④ 人文科学関連科目グループ ⑤ 自然科学関連科目グループ ⑥ 英語関連科目グループ ・ 「全人教育 I～V (担任ゼミ)」の授業内容検討会の開催をする。

<p>教育学部</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教育学部FD活動目標の具体化について 来年度新設される乳幼児発達学科を含めた教育学部全体のFD活動の目標について検討し、確定する。 ・ 授業アンケートについて 教育学部独自のアンケートを作成する。授業アンケートを教師と学生の学びの共同体とするための手段と位置づけ、アンケートの項目や方式を工夫する。たとえば、授業をとおして興味深かったところ、その逆にわかりづらかったところ、今後さらに勉強したいと思ったところなど授業内容に、より密着した問いを設けることが考えられる。それにより、アンケートをとおして、教える者は所定の授業目標をどれだけ達成できたかを確認し、授業改善に生かす。学ぶ者は、授業を評価しながら、自己の学習についてふりかえり、習得したことを整理したり残された課題を確認する。そのように、授業改善をめざしながら、教師と学生が相互に教え学び合う関係を構築するアンケートの作成をめざす。 ・ 授業アンケート実施要領の策定について 全科目を対象としたアンケートを実施するためのプログラムを策定する。
<p>芸術学部</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 海外に限らず、外部講師を招いて教員を対象にFDに関する講義をもっていただく。また学部スタッフ間で学部の教育理念、基本的な原則について共通の理解を促進するための施策を行う。上の外部講師の招聘などもその一環として行う。ほか
<p>女子 短期大学</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 短期大学FD活動の主たる目的と目標は、平成14年度から継続して以下のように行う。 <ul style="list-style-type: none"> 目的：教員個々人の資質と能力（教職に対する愛着や使命感と知識や技能）の土台を強固にすること。 目標1．本学FD活動の目的を正しく理解する。 目標2．FD活動の社会的な要請や責任を理解する。 目標3．優れた資質と能力をもった個人の集合が強い教授団となり、本学の競争優位性を確保することを理解する。 ・ 全学的なFD研修には今年度も積極的に参加し、教員間でFD活動の意味をよく理解し意識を高めるよう努める。

§ 文学部

(1) F D活動への取り組み理念・目標

ある限られた教員のみが活動を担うのではなく、全員が何らかの形でF D活動に参加できる体制にしたい。

(2) 学部におけるF D活動の組織体制

国際言語文化学科は学科運営委員会と授業運営委員会の二つの会議体で学科・授業運営に関わる様々な事項を審議・実施している。

(3) 14年度の活動内容

学生による授業評価への取り組み

- (ア) 国際言語文化学科は春semester終了時に実施。全授業・全科目。
- (イ) アンケート結果を授業運営委員会で分析。結果をWebで公表した。
- (ウ) 自由記述項目に関しては当該の科目担当者のみ知らせた。
- (エ) アンケートで好評だった科目担当者に学科会で授業方法について発表してもらった。

研修活動の組織的な取り組み

- (ア) プレゼンテーション研修会に10名が参加した。
- (イ) AV機器の取り扱いに関する研修会を実施した。

その他の取り組み

シラバスの記載に関する調査を行い、記載のない科目、記載が不十分な科目については、科目担当者に連絡して書き直してもらった。

(4) 今後の予定や課題

- ① 今年度から3学科体制になるので、学科相互の連携をはかっていきたい。
- ② 学生によるアンケート調査を全学科で行っていきたい。
- ③ 学外のF D研修会、研究会にも積極的に参加していきたい。

§ 農学部

(1) F D活動への取り組み理念・目標

- ・ 全学F D委員会と協調しながら、プレゼンテーション研修会などに参加し、また、学生による授業評価を試行する。これらを通じて、教員の教育技能開発を進める。
- ・ 若手教員の学位取得に結びつく活動を技能開発と捉え、援助・助成する。

(2) 学部におけるF D活動の組織体制

大学F D委員（松香）、農学研究科長（佐々木）、生物資源学科2名（露木、小野）、応用生物化学科2名（堀、八並）計6名から構成する。

(3) 14年度の活動内容

学生による授業評価への取り組み

- (ア) 春semester終了時に、有志に依頼。15名、25科目で実施した。
- (イ) 秋semester終了時に、有志に依頼。17名、25科目で実施した。

研修活動の組織的な取り組み

全学F D委員会とタイアップしながら、5回のプレゼンテーション研修会に各回両学科から1名ずつ参加者を出した。計10名が参加した。

その他の取り組み

学位を取得する活動計画に従って、若手教員の能力開発援助を行った。
(一部の実験経費、論文製作指導に関わる旅費等の助成。)

(4) 今後の予定や課題

- ① 全学委員会と協調して、プレゼンテーション研修会、学生による授業評価の継続的実施。
- ② 農学部F Dのあるべき姿を討議し、農学部の路線を明確にする。
- ③ 大学F D委員会が作成したパンフレットに基づいて、F D概念の啓蒙。進行ステップを明らかにする。その実施。

§ 工学部

(1) F D活動への取り組み理念・目標

玉川大学工学部で社会的にインパクトの大きい、優秀な全人的技術者を育成するために、工学部の教育や教育環境の改善をおこなう。

(2) 学部におけるF D活動の組織体制

工学部自己点検委員会として、活動する。

各学科と共通部門から各1名、計5名の体制で構成する。

(2002年度のみ引継ぎのために+1名、6名体制であった。)

(3) 14年度の活動内容

学生による授業評価への取り組み

平成12年度、13年度と実績を積み重ねてきたことをふまえて、平成14年度から本格実施を行った。

春semester、秋semesterと2度にわたって実施したもので、報告書は13年度秋semester分を14年度6月に、14年度春semester分を14年度12月に発行している。また、得られたデータから、学生の自学自習の強化キャンペーンを行うことになった。

<新入生への「学生による授業評価」ガイダンスの準備>

平成15年度4月に行われる新入生研修において「授業評価」のガイダンスを行い、その趣旨や書き方、心構えなどのガイダンスを実施する予定である。時間10分、パワーポイントによるプレゼン、パンフレット作成(アンケート用紙添付)。

研修活動の組織的な取り組み

毎年実施している工学部F D研修会を14年度も引き続き実施した。

各学科は、工学部の改組に関して、全体的な取り組みや、カリキュラム検討結果などの討議を行った。また、工学部自己点検委員会からは「入試志願者増加対策」について調査、討議を行い、その結果を発表した。

日時：平成15年3月28日(金曜日)14:00~17:00

場所：工学部校舎123教室

内容：(ア)工学部改組に伴う検討課題

- ・工学部の改組に望むこと(教学部長)
- ・改組の経緯と今後の課題
- ・全体討論

(イ)自己点検委員会報告

- ・今年度の活動報告と今後の予定
- ・自己点検委員会からの提言

その他の取り組み

(ア) 自己点検ニュース発行 15号から 21号

15号：平成13年度秋 Semester 学生による授業評価の報告（4月1日発行）

16号：平成14年度春 Semester 学生による授業評価の報告（10月1日発行）

17号：科学研究費補助申請キャンペーン

（制度の説明、日本の申請状況、玉川の申請状況、今年度の申請方法。）

18号：大学FD委員会特集（12月1日発行）

（後藤先生巻頭言、組織紹介、活動紹介、プレゼンテーション研修キャンペーン。）

19号：委員会の提案活動報告

（「施設・設備計画の中長期的な要望」調査に12項目応募、3件実現報告、提案方法。）

20号：秋 Semester 学生による授業評価の報告（3月1日発行）

21号：学生の自学自習特集（編集集中）

【設備提案】

- ・ 時計の設置 →実現
- ・ 小教室への据え置きマイクの設置
- ・ 無線LANアクセスポイントの設置
- ・ IDカード開錠システムの導入 →実現の方向で検討
- ・ 450 教室への内線電話の設置 →実現
- ・ スクリーンの更新
- ・ 教室への据え置き型液晶プロジェクターの設置 →実現
- ・ 黒板のワイド化
- ・ 教室のいすと机のOA化
- ・ 渡り廊下の設置（本館とS棟との間）
- ・ 中庭の整備
- ・ 全学共通の講義棟の建設
ーその後の提案受付（来年度に検討）ー
- ・ 教卓のワイド化
- ・ 研究室の本箱などの耐震工事

(イ) 科研費キャンペーン

科研費を獲得できるかどうかで、工学部の教育競争力に大きな差が出る可能性があるとの認識から、申請の時期にあわせて、自己点検ニュース発行17号：科学研究費補助申請キャンペーンを特集した。

制度の説明、日本の申請状況、玉川の申請状況、などについてデータを交えてキャンペーン記事を掲載し今年度の申請方法を具体的に紹介した。その結果、申請件数13件（昨年は10件）と3件の増加となる。学園全体では32件から37件に増加している。なお、この増加には、大学院予算申請が科研費申請と連動方式をとったことも大いに寄与しているものと思われる。

(ウ) 学生の自学自習キャンペーン

4 回の授業評価の中で、学生が最低の点をつけたのが、自学自習を行ったか、という項目で、常に 3 以下の評価であった。これを、教員の工夫で自学自習を行いやすい環境づくりを工夫する一助として、委員会で話し合った結果と、様々な活動を行っておられる先生方の投稿文を募集し、自己点検ニュースに掲載の予定で、編集作業を進めている。

寄稿：中村先生（米国の様子）、大久保先生（特別課題研究の活動）、
菊池先生（イーラーニング）、野渡先生（講義の工夫）など

(エ) プレゼンテーション研修会への参加

大学全体の活動としてプレゼンテーション研修会が実施され、工学部は全 5 回の開催に計 8 名の教員が参加した。今後も積極的な参加が期待される。

(オ) 大学 F D のキャンペーン

11 月 14 日（木曜日）工学部教授会で大学 F D のパンフレット配布とともに活動を報告。

(カ) 入試志願者数増加対策に関する調査と提言

入試志願者数増加対策に関する調査を行い、委員会としての提言も含めて 3 月 28 日（金曜日）工学部 F D 研修会で発表

学生の意見・満足度等の収集，フィードバック

工学部では、平成 12 年 10 月より学生からの声を聞く「提案ボックス」の設置を開始している。これは、工学部をより良い学部にしてゆくための方法のひとつとしての「目安箱」的なもので、学生からの声を積極的に聞けるよう、建設的な提案をいただけることを狙って実施したものである。運営については、提案のすべての案件を工学部長が調整し、関連部署と協調することで解決していくことにした。設置場所は工学部長室前とした。

< 実現した提案の事例 >

・ロビー展示設備

工学部校舎ロビーをソーラーカーや学生の研究発表の場として利用したいという要望があり、それを可能とすると同時に天井に照明装置を設置した。

・労作用水道設備

労作終了時の農具や泥靴などの後始末のために、屋外に水道施設がほしいという要望があり、工学部校舎南側と中庭に水道設備を設置した。

・可動機と椅子の教室

通常の勉学の場としてや学園祭などの発表の場として、空間をレイアウトし易い教室が欲しいという提案があり、2 教室分について固定机を撤去し、移動可能な机と椅子に設備し直した。

・ファーストフード店設置

ファーストフード店を設置してはどうかとの提案があり、学生食堂「けやき」内

を改装しMOSバーガーが開店した。

・資格取得のサポート

社会に実際に役立つ国家資格の情報を提供して欲しい、取得のサポートをして欲しいとの提案があり、情報処理2級について担任の時間に詳細を紹介したり、試験の対策講座を特別講義の形で土曜日に3時間、6回に亘り開講した。

(4) 今後の予定や課題

平成15年度工学部FD計画について以下に示す。

基本的な進め方

基本姿勢1：今までの活動を、淡々と推進する。

基本姿勢2：今までの活動をFDの枠組みの中でもう一度見直し、推進する。

(FD提案計画書、効果評価書)

具体的な施策1：FD研修会

毎年年度末に行っているFD研修会を開催する。この中で、工学部のかかえる様々な問題を教員同士で話し合い、解決策の検討を行う。このようなことを通して、問題点を共有するとともに、解決に向けた推進力を醸成する。

具体的な施策2：教育方法改善

(ア) 学生による授業評価の継続

- ・今後、授業改善とどのように結び付けてゆくか((ii)を参照)。
- ・学生に公開結果を見てもらえる展示方法の改善。
- ・シラバスに添付(希望科目のみ)(電子的な公開)。
- ・履修登録の時期に合わせて展示公開。
- ・学生向けの報告会を開催。
- ・履修ガイダンスのときなどに広報(学期末)。
- ・テクノフェスタで展示。
- ・回収方法の改善(学生が提出しやすい雰囲気作り)。
- ・授業評価の意義を理解してもらい、継続して協力してもらえる雰囲気作り(入学研修などで説明)。
- ・公開までの手続きの簡素化。

(イ) 学生の自学自習の啓蒙活動(実体調査、自己点検ニュースの特集、講演会の開催、教員の教授法、学生への啓蒙)。

- ・世の中の実体調査(日本青少年研究所データ、ニューズウィーク特集など)。
- ・米国の自学自習のシステム(中村先生など)。
- ・e-learningの紹介(菊池先生、IBM)。
- ・工学部教員の実施事例(野渡先生、白崎先生など)。
- ・特別課題研究の授業システム紹介(大久保先生、鈴木先生など)。
- ・工学部主催の講演会開催(切田先生、中村先生、他大学の成功事例など、30分程度の気楽に聞ける講演会)。

- ・ 学生に向けた啓蒙活動。
- (ウ) 学生の付加価値の上げ方，測定方法について検討する。
- ・ 基本は，普段の勉学で，どのくらい実力がついたかということ（成績評価のつけ方が社会的に妥当かなど）。
 - ・ 就職先のレベルアップ，就職率の向上策。
 - ・ 各種資格試験の推奨とフォローアップ（データなど）。
 - ・ 売り出し方の工夫（テクノフェスタで卒論発表会（パネルなど）を行うなど）

具体的な施策3：研究の活性化

- ・ 科研費申請手続き説明会の開催，他の企業からの研究費の獲得コンサルティング，働きかけ。
- ・ 研究成果の広報活動（TLOなどとの連携）。
- ・ テクノフェスタでの技術講演会の提案（前年度外国発表を発表してもらうなど）。
- ・ 共同研究の奨励策を検討（教員間の交流やお互いの研究内容，関心，困ったことを共有，コーディネート）。

具体的な施策4：学生の勉学環境の改善

時計の設置，黒板のワイド化，ID鍵，電子掲示板の導入など，これらの活動をFDチェックし，広報してゆく。各種提案制度を確立し，みなが提案しやすい環境を整える。いつごろ提案できるのか，提案の方法（書式など）の周知。

具体的な施策5：入試志願者増加対策

「入試志願者増加対策」について調査・討議を実施，計画を立てて実施してゆく。

§ 経営学部

(1) F D活動への取り組み理念・目標

- ① 質の高い卒業生（経営学部のミッション・ステートメントを体現し得る卒業生）の輩出。
- ② リベラルアーツを基盤とした経営学教育の実現。
- ③ 21世紀社会に生き残ることのできる経営学部—少子化時代・大学全入時代にあって、運営を維持しうる体力をもった学部の形成。
- ④ 玉川学園および玉川大学全体の評価を高める学部の形成。

(2) 学部におけるF D活動の組織体

- ① 学部の専任教員全員が参加するF D会議—毎月一回、教育研究会および研究発表会の形式で開催。
- ② 全学F D委員会経営学部会—各学期に一回、学部の教育システムを確認、検討するために開催。

注：全学F D委員会の学部への提案（課題）等は教授会で審議、報告。

(3) 14年度の活動内容

学生による授業評価への取り組み

- (ア) 経営学部の「学生による授業評価」は主に英語系科目において平成13年度以降実施されてきたが、14年度秋学期よりその他の科目に関しても実施された（希望する教員のみ）。
- (イ) アンケートのフォームは工学部方式とし、原則として、最終授業時間に20分程度の時間を確保して実施した（実施にあたっての説明時間を含む）。
- (ウ) アンケート結果に関しては平成15年度春学期に経営学部ホームページに掲載予定。

研修活動の組織的な取り組み

- (ア) 経営学部F D会議の開催（8回）および全学F D委員会経営学部部会の開催（2回）。
- (イ) 国際会議への参加。
 - ・ 『IBM北米コンソーシアム』への出席（6月／モントリオール、カナダ／1名派遣）。
 - ・ 『国際ファースト・イヤー・エクスペリエンス会議』への出席（7月／バース、イギリス／1名派遣）。
 - ・ 『e-Learning & ThinkPad University Fly-in アジア会議』への出席・発表（9月／玉川大学／経営学部専任教員）。
 - ・ 『日本産学フォーラム国際産学ワークショップ』への出席（12月／東京プリンスホテル／1名派遣）。
- (ウ) 国内会議および講演会への参加。

- ・ インターンシップ学会への出席（6月／1名派遣）。
 - ・ 全国経営学部長会議への出席（9月／作新学院大学／2名派遣）。
 - ・ 『専修大学FD講演会－一年次教育の実際と課題〈講演者：山田礼子同志社大学助教授〉』への出席（11月／専修大学／1名派遣）。
 - ・ 『特別公開講座「アメリカの一年次教育の現状と背景」〈講演者：ランディ・スイング博士〉』への出席（11月／アルカディア市ヶ谷／2名派遣）。
 - ・ 『大学コンソーシアム京都FDフォーラム－学びのスクラム会議』への出席（3月／立命館大学／1名派遣）。
- (エ) 上記国際会議および国内会議の参加報告会の開催。
- (オ) 第1回経営学部教員研修会の開催（3月）－全専任教員および非常勤教員9名の参加。

その他の取り組み

(ア) 冊子の編纂・発行

- ・ 「経営学部FD会議報告書2001」
- ・ 「国際研究報告書2001」
- ・ 「経営学部インターンシップ報告書2001」

(イ) 書籍の発行

- ・ 経営学部専任教員編著、「国際経済と経営」玉川大学出版部
- ・ 経営学部専任教員編著、「国際社会と文化」玉川大学出版部

(4) 今後の予定や課題

- ① 第2回経営学部教員研修会の開催（7月または8月）。
- ② 第3回経営学部教員研修会の開催（3月）。
- ③ 学生による授業アンケートの実施（春学期・秋学期）。
- ④ 国内外のFD関連会議への参加・発表。
- ⑤ 授業内容を調整するための関連科目授業担当者ワークショップの開催。
 - (ア) 経営学関連科目グループ
 - (イ) 国際文化関連科目グループ
 - (ウ) 社会科学関連科目グループ
 - (エ) 人文科学関連科目グループ
 - (オ) 自然科学関連科目グループ
 - (カ) 英語関連科目グループ
- ⑥ 「全人教育I～V（担任ゼミ）」の授業内容検討会の開催。

§ 教育学部

(1) F D活動への取り組み理念・目標

教育学部では、「教育の玉川」という伝統をふまえ、学校教育はもちろん、生涯教育、社会教育などの諸分野で幅広く活躍できる教育プロフェッショナルの育成を目指したカリキュラムを導入している。教員がそのカリキュラムを実現できる力量や姿勢を向上させることが、教育学部F D活動の主たる目標である。これを基本方針として、平成15年度から新設される乳幼児発達学科を含めた教育学部F D活動の目標を今後つめてゆく。

(2) 学部におけるF D活動の組織体制

教育学部長、学科主任、教務主任、学生主任、教務・教職担当で組織する。教務・教職担当者会を中心に、適宜審議および報告を行った。

(3) 14年度の活動内容

学生による授業評価への取り組み

平成14年度秋学期においては、教育学部教育学科の必修科目、必修選択科目、選択科目のなかから、科目の性質や受講者数などを勘案して適当と思われる科目を対象として、授業アンケートを試行的に実施した。実施後、各担当教員が回収し、授業改善に生かすこととした。また、アンケートの内容や方法に関して、意見や感想を集めた。

研修活動の組織的な取り組み

(ア) フィールド研修

教養行事の引率にくわえて、以下のような具体的なF Dフィールド研修活動を展開した。

- ・ 教育実習生訪問指導。教育実習生の実習現場を訪問し、現場での具体的な実習指導を行うと同時に、現場理解を深める。
- ・ 教職プラクティクム（参観実習）指導。将来教職を希望する1年次生の学内外における活動を引率し指導するとともに、現場での教育活動への理解を深め、日頃のオンキャンパスでの指導に生かしている。
- ・ 2年次・3年次の学年研修（2年生：箱根、3年生：河口湖にて実施）などで、学外や教育現場にできる限り足を運ぶ。

(イ) シラバスの充実

シラバスをより授業と連動したものとするように教員間の意思統一をはかる。さしあたり、15年度3年次生の演習Ⅲ・Ⅳ履修登録手引きの作成に際して、演習概要の充実と授業計画の具体化をお願いした。

(ウ) 各種F D関係研修会への参加

- ・ 平成14年度インターンシップ推進全国フォーラム（於・名古屋国際会議場、平成14年11月22日）への参加（出席者：富永順一、佐藤隆之）。
- ・ 第8回F Dフォーラム～学びのスクラム～（於・立命館大学、平成15年3月

8・9日)への参加(出席者:若月芳浩)。

- ・第2回大学教育研究集会並びに第9回大学教育改革フォーラム(於・京都大学,平成15年3月15日)への参加(出席者:今尾佳生,富永順一,佐藤隆之)。

(エ) 教員への啓蒙活動

- ・『新卒,無業一なぜ,彼らは就職しないのか』(大久保幸夫著,東洋経済,2002年)を運営担当者に配布した。PD(professional development)の一つとしての職能開発について紹介し,授業や学生指導に役立てることを提案した。
- ・2002年11月6日の学科会でパンフレット(「玉川大学のFaculty Development」)を配布し,FD活動の目標や今後の予定について説明した。プレゼンテーション講習会についても併せて説明した。

その他の取り組み

(ア) 教職支援室の開設

教員採用に力を入れるために,平成14年度より開設。教職関連の書籍を購入して,常時参照できるようにした。

(イ) プレゼンテーション研修会への参加

教育学部は計7名が参加した。

(ウ) オムニバス方式授業の導入

平成15年度より,1年次の必修一科目(現代文明論)について,複数の教員で担当する。教員の共同により,学生の多様なニーズに対応し,授業内容もより密度の高いものとする。教員相互の学びの場ともする。

(4) 今後の予定や課題

① 教育学部FD活動目標の具体化

来年度新設される乳幼児発達学科を含めた教育学部全体のFD活動の目標について検討し,確定する。

② 授業アンケートについて

教育学部独自のアンケートを作成する。授業アンケートを教師と学生の学びの共同体とするための手段と位置づけ,アンケートの項目や方式を工夫する。たとえば,授業をとおして興味深かったところ,その逆にわかりづらかったところ,今後さらに勉強したいと思ったところなど授業内容に,より密着した問いを設けることが考えられる。それにより,アンケートをとおして,教える者は所定の授業目標をどれだけ達成できたかを確認し,授業改善に生かす。学ぶ者は,授業を評価しながら,自己の学習についてふりかえり,習得したことを整理したり残された課題を確認する。そのように,授業改善をめざしながら,教師と学生が相互に教え学び合う関係を構築するアンケートの作成をめざす。

③ 授業アンケート実施要領の策定

全科目を対象としたアンケートを実施するためのプログラムを策定する。

§ 芸術学部

(1) F D活動への取り組み理念・目標

学部として設定した理念の，より高度な達成に資するようF D活動を行う。

(2) 学部におけるF D活動の組織体制

学部長を筆頭に，ビジュアル・アーツ学科主任，パフォーマンス・アーツ学科主任。大学F D委員会との連絡役として，学部選出の大学F D委員で組織する。

(3) 14年度の活動内容

学生による授業評価への取り組み

秋学期のすべての学部開講科目について実施。当初春学期分から実施の予定だったが，開講時，学生に対して授業評価にかんする周知が徹底していなかったためこれを延期した。その結果春学期末に学生に秋学期の授業評価に関して説明した上で，これを実施。調査はWEB ベースで行い，データ処理については外部業者にすべて委託した。現在のところ，今後も同様の方法で行う予定。

研修活動の組織的な取り組み

プレゼンテーション研修への教員の派遣を行う。

その他の取り組み

F Dに関して，学部共同研究予算としての英米系大学との人材交流。今年度はロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ，デザイン学科教授のリチャード・キンブル教授を招聘。芸術学部科目の視察，教員，および学生を対象とする，デザイン教育についての特別講義，および視察結果報告書の提出をしていただいた。いっぽう，本学部からはパフォーマンス・アーツ学科講師中村岩城，ビジュアル・アーツ学科講師林卓行が，アメリカのイサカ・カレッジ，フィラデルフィア芸術大学，スワースモア大学，ニューヨーク大学を訪問。とりわけ各大学での芸術教育について視察した。同様の人材交流は，来年度以降も継続して実施の予定である。

(4) 今後の予定や課題

海外に限らず，外部講師を招いて教員を対象にF Dに関する講義をもっていただく。また学部スタッフ間で学部の教育理念，基本的な原則について共通の理解を促進するための施策を行う。前述の外部講師の招聘などもその一環として行う。ほか

§ 女子短期大学

(1) F D活動への取り組み理念・目標

女子短期大学におけるF D活動の理念は、「よりよい社会の形成に貢献し続ける玉川大学教授団の形成」である。すなわち、F D活動により組織の目的と個人の目的との整合性を図り、組織的にも個人的にも変化の時代を生き抜く力を得ることである。しかし、女子短期大学は学部への改組転換期にあり、教員の各学部への就任がおこなわれることを念頭において、F D活動の主たる目的を教員個人々の資質と能力（教職に対する愛着や使命感と知識や技能）の土台を強固にすることとした。そして、次の年度目標に従い活動をすすめた。

目標1. 本学FD活動の目的を正しく理解する。

目標2. FD活動の社会的な要請や責任を理解する。

目標3. 優れた資質と能力をもった個人の集合が強い教授団となり、本学の競争優位性を確保することを理解する。

(2) 学部におけるF D活動の組織体制

学部長、主任の5名によって女子短期大学F D委員会を組織した。

(3) 14年度の活動内容

学生による授業評価への取り組み

幼児教育科の全教員が携わる科目（総合演習）において到達目標の効果測定（学生アンケート方式）をおこなった。それを前年度の評価と比較検討し、本学の教員養成課程における総合的学習のあり方や研修教育のあり方を研究する基礎資料とした。

研修活動の組織的な取り組み

(ア) 授業参観の実施

学科の全教員が携わる科目（総合演習）において、学科の複数教員が授業を学生と共に受講して実施日の担当者の話し方、マイクの使い方、資料の提示方、授業の組み立て方などについて、優れた点や改善すべき点の指摘や提案をおこなった。また、この科目では参加したすべての教員が授業内容を理解しているので、技術的な指摘にとどまらず授業内容に踏み込んだ指摘がおこなわれ授業内容の改善にも役立った。

(イ) F D活動の必要性と目的の明確化

FD活動を組織的、継続的に推進しなければならないことを全教員が理解するために、「玉川大学のFaculty Development」をはじめ、「大学の質の保証に係る新たなシステムの構築について（答申）」などの冊子を全教員に配布し大学の大衆化や将来の第三者評価導入などについての理解を深め、これらに対応するF D活動の必要性を明確にした。

(ウ) F D活動の意識化

F D活動が優先的、継続的におこなわれなければならない活動であることを一人ひとりの教員が意識化できるように、各種の会議において折にふれF D的視点で教育活動を点検することが学部F D委員によりおこなわれた。

その他の取り組み

(ア) プレゼンテーション講座の受講

大学F D委員会主催のプレゼンテーション講習会に9名の教員が参加をした。参加者は受講後、教授会において未受講の教員も授業改善に役立つように報告をおこなった。

(イ) アメリカの1年次教育の現状とその背景

米国の初年度教育について講演会で得た情報を、学部F D委員がすべての教員に報告した。

(ウ) I Tの活用

2001年から幼児教育科の全学生と学科の全専任教員が参加する電子会議室をホームページ上に設けてI Tの授業活用を研究してきたが、2003年度よりチャットネットに加わり、教員養成課程におけるI Tの活用について研究している。

(エ) シラバス記入100パーセント

女子短期大学所属の教員及び非常勤教員全員がシラバスを公開し、シラバス記入100パーセントを達成した。

(オ) 教授方法の工夫と研究

複数教員が担当する科目において「学習の手引き」を作成し、学習目的・目標や学習方法の明確化を図り、教員と学生がそれぞれの立場から科目の到達目標を達成できるように教授方法（師弟同行の具体化）を工夫した。

(カ) 研修や実習の連携化

「新入生研修」、「学科研修」、「教育実習」、「コスモス祭研究発表・実習」などの各活動コンセプトの明確化を図り連携を強化することによって、教員養成課程における研修や実習のありかたと位置づけを工夫した。

(キ) 個人の力からチームの力へ

個々の教員が収集した教育関連情報（新聞記事など）を学科の他の教員に配布し、情報の共有化を図り個人の力がチームの力となるように努めた。

(ク) 幼稚園教育現場の理解促進

幼稚園教員との「研究協議会」の開催や園の訪問を通して、現場の要請や状況を理解することに努めた。

(4) 今後の予定や課題

- ① 女子短期大学FD活動の主たる目的と目標は、平成14年度から継続して以下のように行う。

目的：教員個々人の資質と能力（教職に対する愛着や使命感と知識や技能）の土台を強固にすること。

目標1．本学FD活動の目的を正しく理解する。

目標2．FD活動の社会的な要請や責任を理解する。

目標3．優れた資質と能力をもった個人の集合が強い教授団となり、本学の競争優位性を確保することを理解する。

- ② 全学的なFD研修などには今年度も積極的に参加し教員間でFD活動の意味をよく理解し意識を高めるよう努める。

教員研修

1. 天城研修

学校法人玉川学園の管理部門である総務部主管の「天城エグゼクティブセミナー」Aグループに大学FD委員会メンバーが参加し、FD活動を推進する上での問題点やその解決策等について議論を交わした。2泊3日の研修で得た成果は、短期的な大学FD委員会としての活動計画が立案できたことや問題解決に向けての解決策が策定できたことが挙げられるが、一番の成果は委員相互のFD活動に関する意識の高揚が図られたことや、共通認識を持つことができたことであった。

実施時期： 2002年7月24日～7月26日

開催場所： 日本IBM 天城ホームステッド

参加者： 島川聖一郎，後藤昌彦，松香光夫，藤田裕二，山本庸介，
菊池重雄，佐藤隆之，林 卓行，中村慎一，切田節子

セッションリーダー： 北見 裕

事務局： 稲葉興己

天城研修 Aグループセッション

メインテーマ： 「21世紀の玉川教育を支える人材育成を目指して」

Aグループサブテーマ：
・玉川大学におけるFD活動とFD委員の果たす役割の明確化
・FD活動推進における阻害要因の整理と解決策の策定

(1) 玉川大学におけるFD活動の定義

専任教員による組織的継続的な教育の改善活動。

(2) FD活動を行う目的の明確化（共通認識）

- A. 玉川の教育理念を実現するため。
- B. 大学大衆化時代に対応するため。
- C. 競争優位性を確保（受験生の大学選択等）するため。
- D. 21世紀の玉川教育を支える人材の育成。

(3) 大学FD委員会の具体的な活動内容（大学FD委員会での議決事項）

- ① FDに関する啓蒙活動をする。（講演会開催・冊子等の作成）
*講演会などでは教授法やIT活用法についても内容に含めたい。
- ② 教員の職責に係る啓蒙活動をする。

- ③ 教授方法の研修会を開催する。
- ④ 教員の教育活動に関する総合的評価方法を検討する。
- ⑤ 新任教員の研修をする。
- ⑥ 学外の教員研修会への教員派遣（参加）をする。
- ⑦ 全学共通科目の学生による授業評価を実施する。
- ⑧ 全学をまとめたFD活動報告書を作成する。

(3) -1 今回の研修会で加えられた活動内容

(3) 1-1 FD研修会の実施（学生接点の技術）

- ・プレゼンテーション
- ・コミュニケーション（集団討議方法）
- ・I. C. T.（設備・機器利用法含む）
- ・シラバス作成と活用
- ・学生を評価する方法

(3) 1-2 教育システムの研究

- ・教育システムの先進校の事例研究
- ・カリキュラム改革
- ・インターンシップ
- ・TA, SA
- ・初年次教育
- ・アカデミックアドバイス制度

(3) 1-3 第三者による教育の評価

- ・学外者による評価制度
- ・FD委員による評価
- ・評価者の選定

(4) 玉川大学でFD活動を推進する上での問題点

- P-1 教員の教育に対する認識不足。
- P-2 （意欲のない教員に対してペナルティーがない。）
- P-3 （意欲のある教員に対して褒賞がない。）
- P-4 教員としての基本的な共通認識がない。（暗黙知）
- P-5 授業評価実施に対する認識不足。
- P-6 玉川大学の置かれている（世間一般から）状況に対する認識不足。
- P-7 評価や批判に弱い体質・風土がある。
- P-8 学生の心情に対する認識不足。
- P-9 学生の現状に対する認識不足。
- P-10 大学生活に対する学生自身の認識不足。
- P-11 教員が忙しすぎる。

P-12 FD活動の支援体制が整っていない。

P-13 学部独自のFD組織の未整備。

(5) 解決策の策定(問題点としての各認識不足の項目に対する解決策の策定)

解1. 教員に対してFD啓蒙冊子を製作し、説明会を実施する。

Must Do

① FD啓蒙用冊子(パンフレット)の制作については次回FD委員会で検討する。

責任者: 山本

解2. 学部長の責任においてFD活動を推進する。

Must Do

① 学部長を召集し、FDセミナーを開催する。

② 危機データを関連部署から提供してもらう。

責任者: 後藤 期限: 9月大学部長会

解3. 教員に対する啓蒙活動を行う。

Must Do

① FD研修会の実施のための時間割等教員スケジュールの環境整備の依頼。

② FD研修会の内容について次回FD委員会で検討する。

責任者: _____ 期限: 次回, 大学FD委員会

解4. ・授業評価の目的・理念については、大学FD委員会で継続審議し、その結果を学部にフィードバックする。

・P-11~13については、大学FD委員会で別途審議する。

責任者: 大学FD委員会

(6) ニーズ

FD資料室を作って欲しい。

(7) 解決策の実行スケジュール

S-1 冊子の作成 (9月20日)

S-2 FD説明会及び学部長によるFD推進 (10月教授会)

S-2-1 学部としてのFD目標設定 → 検討委員会設置

S-2-2 大学全体のFD目標設定 → 検討委員会設置

S-3 委員会活動 (9月末~03年2月)

S-4 検討課題の報告と提言 (03年3月)

S-5 フォローアップセッションの開催 (3月)

S-6 提言の実行

2. プレゼンテーション研修

(1) 実施の概要

第1回FD委員会にて開催が決定され、平成14年度に計5回実施した。参加者の募集、資料のコピー、ビデオ器材の準備など教学部の協力を得ながら、実際の研修の企画、開発および実施は切田が行った。参加人数は合計59名（詳細は次頁「参加一覧」参照）で、急な業務の都合で一部欠席した2名を除き、ほぼ全員がすべてのプログラムに参加した。

2日間、朝9時から17時までの日程で、演習が中心である。研修の内容については、後述「B. 研修の概要」の通りであるが、特記すべきことは、ビデオを使った演習方法と、他の参加者による評価である。ビデオで客観的に教壇での自分の姿を観察することや、同僚である教員を前に模擬授業を行い、評価されるということは、大学という場ではなかなか経験できないことであり、それだけ成果も大きい。

アンケート結果やフリーコメントなどから、ほぼ期待通りの成果があったと考えられる。ただし当該研修の目標は、あくまで改善点について自ら気づき、改善努力の意識をもつことにとどまる。最終的には実際に改善し、より効果的な授業を実施しなければ意味がない。それは、一人一人の教員の努力にゆだねるしかないという研修の限界を認識し、幅広いFD活動を継続していくことが重要である。そういう意味で、当該研修は、FD活動の最初の一步といえる。

(2) 実施の状況

開催の日程、参加人数、開催場所は、以下のとおりである。

- ・第1回： 7月22日（月）～23日（火） 11名 視聴覚センターB104
- ・第2回： 7月29日（月）～30日（火） 14名 視聴覚センターB104
- ・第3回： 12月19日（木）～20日（金） 11名 視聴覚センターB104
- ・第4回： 3月17日（月）～18日（火） 11名 経営学部校舎204
- ・第5回： 3月19日（水）～20日（木） 12名 経営学部校舎204

初めての研修開催で、最初の2回は、講師および事務局側もとまどうことが多く、事務連絡がスムーズにいかないなど不手際もあった。また受講する側もどんな研修か分からないため不安があったようである。それなりの成果はあったが、種々の面で改善の必要性を感じた。第3回目に向け、「受講のしおり」を作成し、FDのパフレットと同時期に配布した。これによって、受講側の漠然とした不安や誤解は解消した。

また研修内容や運営方法も大幅に改善した。クレームの多かった場所については、第4回目から改善された。このように適宜に改善を行った結果、3回目ではアンケートのポイントは向上し、4回目以降さらに向上した（後述「アンケート結果」を参照）。また、フリーコメントの内容も好意的なものが多くなってきて、この研修の重要性が少しずつ理解されてきたことを感じる。

平成14年度 プレゼンテーション研修会参加者一覧

学部	学科	参加者氏名(敬称略)				
		第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
文	人間学科		大竹 信子		中山 剛史	
	国際言語文化学科	渡邊 淳也	小田 眞幸	関口 宏道	丹治めぐみ	藤田 裕二
			登丸 求己			平高 典子
	(教育学科)	富永 順一			若月 芳浩	
(外国語学科)			中田 憲三	市川 直子		
(英米文学科・国経)			玉木 勝			
農	生物資源学科	田淵 俊人	松山 繁博	露木 美英	山崎 旬	南 佳典
応用生物化学科	八並 一寿	松山 惇	竹中 哲夫	東岸 和明	薬袋 裕二	
工	機械工学科		小倉 研治		鈴木 夏夫	菅沢 深
	電子工学科		榎本 保治			春名 勝次
情報通信工学科	小林由紀男					
経営工学科	阿久津正大		永田 勝明			
経営	国際経営学科	稲垣 明博	川野 秀之	飯野 峻尾	立木デニス	海野 博
		芦沢 成光	古島 義雄			大金エセル
教育	教育学科		高平小百合	高島 二郎		梅沢 一彦
						山田 信幸
芸術	ビジュアル・アーツ学科		椿 敏幸	土屋 俊典	加藤 悦子	林 卓行
パフォーミング・アーツ学科	小佐野 圭	中村 岩城				
女子短期大学	教養科	網野 公一	渡邊 正彦	藤澤 眞理	石川 晶生	
					中村 聡	
	幼児教育科	益井 重征	小嶋 正敏	大井 晴策		田中 旭
計		11名	14名	11名	11名	12名

(3) 実施後のアンケートから

5 回とも、かなり詳細な事後アンケートをとった。各項目ごとにA～Eまでチェックするものとフリーコメントの両方から当研修を分析してみると、最初の2クラスとそれ以降では、かなりポイントが異なる。研修内容および運営を改善したこと、当該研修のみならずFD活動全体の広報を行ったことなど、最初の2クラスでのアンケート結果を反映させたことによって効果があったと思われる。また、ポイントの低かった施設に関しては第4回目のクラスから改善された。以下に、そのアンケート結果を掲載する。#はクラス番号、点はA=5、B=4、C=3、D=2、E=1として平均を出したものである。

全体について

総合満足度								授業に役立つか								スキルは向上したか							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	6	5				11	4.5	1	7	4				11	4.6	1	1	8	2			11	3.9
2	7	5	1	1		14	4.3	2	7	5	2			14	4.4	2	1	9	1	2		13	3.7
3	8	3				11	4.7	3	9	2				11	4.8	3	2	9				11	4.2
4	9	2				11	4.8	4	10	1				11	4.9	4	3	5	2	1		11	3.9
5	11		1			12	4.8	5	10	2				12	4.8	5	3	7	1	1		12	4.0
計	41	15	2	1	0	59	4.6	計	43	14	2	0	0	59	4.7	計	10	38	6	4	0	58	3.9

研修会の質について

講習内容								講師								テキスト、教材、教具							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	5	5	1			11	4.4	1	9	2				11	4.8	1	7	4				11	4.6
2	6	4	1	2		13	4.1	2	10	3				13	4.8	2	7	5	2			14	4.4
3	8	2	1			11	4.6	3	9	1	1			11	4.7	3	7	4				11	4.6
4	7	4				11	4.6	4	11					11	5.0	4	8	3				11	4.7
5	10	2				12	4.8	5	12					12	5.0	5	11	1				12	4.9
計	36	17	3	2	0	58	4.5	計	51	6	1	0	0	58	4.9	計	40	17	2	0	0	59	4.6

研修会の運営について

日程								時間配分							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	2	4	1	3	1	11	3.3	1	8	3				11	4.7
2	6	4	1	1	2	14	3.8	2	8	4	1	1		14	4.4
3	6	3	1	1		11	4.3	3	6	5				11	4.5
4	6	5				11	4.5	4	10	1				11	4.9
5	8	3				11	4.7	5	8	3	1			12	4.6
計	28	19	3	5	3	58	4.1	計	40	16	2	1	0	59	4.6

どの項目においても、第3回目のクラス以降には、D、E評価が少なくなっており、改善されていることがわかる。

場所および事務連絡について

開催場所								事務処理・連絡							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	1	5	3	2		11	3.5	1		4	4	2	1	11	3.0
2	5	6	1	2		14	4.0	2	2	6	3	2	1	14	3.4
3		9		2		11	3.6	3	2	4	3	1		10	3.7
4	9	2				11	4.8	4	4	3	3	1		11	3.9
5	8	2	2			12	4.5	5	6	3	2	1		12	4.2
計	17	24	6	6	0	59	3.6	計	14	20	15	7	2	58	3.6

場所は、第4回目から、経営学部に変更した。第3回目まであった悪いコメントが皆無になると同時にD評価はなくなった。

研修会の開催について

研修を継続すべきか								他の人に参加を勧めるか							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	8	2		1		11	4.5	1	9		1	1		11	4.5
2	8	4	1	1		14	4.4	2	6	6	1	1		14	4.2
3	10		1			11	4.8	3	8	3				11	4.7
4	10	1				11	4.9	4	9	2				11	4.8
5	10	2				12	4.8	5	9	3				12	4.8
計	46	9	2	2	0	59	4.7	計	41	14	2	2	0	59	4.6

フリーコメントも非常にたくさんいただいた。中には別紙に3枚程度のレポートを提出してくださる方もおり、この研修のみならず学園全体に対する研修についての関心が高いことがわかった。ここにフリーコメント全ての集計を記載することはスペースの関係で省略するが、数多くいただいたコメントを、抜粋して記載する。

■「有用性について」は、研修が役立つというコメントが50件以上あった。その中で何が役立つのかという項目をあげてみると、以下のことが多くあげられている。(括弧内は件数)

自分の改善点を認識し、改善ポイントをつかんだ。(10件)

学習したことが授業改善に役立つ。(8件)

自分自身をビデオで客観的に見たことが有効だった。(6件)

他学部の教員同士の交流が図れたことがよかった。(5件)

その他、「今後、授業改善に取り組んでいきたい」、「プレゼンテーション・スキルを向上させたいと思った」といった前向きな感想も8件あった。

■「運営」「講師」「内容」についてのコメントは約40件あった。その中で悪いコメントは10件で、他はすべて良いコメントである。運営に関する悪いコメントは、人数が多いために演習が長時間に及ぶことに関するものであるが、中には1人10分の演習時間を守らない人が

いることに対するクレームもあった。2日目には参加者の多くが長く話す傾向にあり、1人で30分近く発表する者も出てくる。担当者としては時間に余裕があるときには、そのまま続行させていたが、今後は運営方法を改善していきたいと考えている。講師に関しては、好意的なコメントが多かった。「一人で担当するのは大変だ」という講師に対する配慮あるコメントもあった。確かに今後担当者を増加して対処していく必要があるかと考えている。

■「開催場所」については、項目別ポイントの項で述べたとおり、3回目まではメディア教育開発センター106教室を使用していた。「窓がない」「暗い」「飲食禁止なので交流の場がない」など悪いコメントが多く（18件）あったが、4回目以降は、経営学部204教室に変更したことによってこうしたコメントは皆無となった。ただし今度は、「あまり教室が良すぎて通常使用している教室と格差がありすぎる」という贅沢なコメントが出てきた。

■「参加者選択」については、「強制的に参加させるのはやめてほしい」など全員参加の方針に対する批判的なコメントはわずか1件のみで、「指名すべき」「若手は全員」「強制的に」などの方法に相違はあるが基本は全員参加に賛成するコメントが10件あった。また、1名が1回限り参加するのではなく、「運転免許のように1回限りでなく継続的に時期をおいて参加すべき」という非常に前向きなコメントが7件もあった。今後の参加形態として、是非採用したいご意見である。

■「日程」については、非常に多く（36件）のコメントがあった。「2日は長い」「2日は短い」「2日連続でなく間隔をおくほうがよい」「2日連続に意味がある」など相反する意見が見られるが、「2日間は適切である」というコメントが一番多く（11件）、概ね2日間の日程が受け入れられていると考えることができる。

■「開催時期」については、特に最初の2クラスにクレームが多い（14件）。期末試験の採点中ということ、指名されたのが直前という人もいたということなどが原因で、当然の結果といえる。3回目以降のクレームは皆無である。15年度より、年初に5回の開催予定日を発表することにした。参加者が都合のよいクラスを選択するようにしたこと、問題は解決したと思われる。

■「事務連絡」に関する悪いコメントも多い（22件）。「連絡が遅い」、「少ない」といったクレームが多く、参加する側にとっては情報量が少なく不安を与えたことがわかる。主催者側の準備不足による不手際もあったが、初年度のため致し方ない面もある。12月には、「玉川大学のFD活動」、「プレゼンテーション研修のしおり」などを作成し、情報開示に努めた。かなり問題は解決されていると思うが、15年度からは担当者が学部会などで説明を行うことによって、さらに情報提示をしていく予定である。

アンケートは、項目別のポイントも意味があるが、それ以上にフリーコメントには参加者の本音が表現される。フリーコメントの集計には労力を要するが、多くのメッセージを含むこれらのコメントを大切に、今後もより身近で役に立つ研修を提供していきたいと考えている。

プレゼンテーション研修のしおり - 受講のご案内 -

プレゼンテーション研修への参加を推進する目的で、全教員対象に配布したプレゼンテーション研修案内の本文を以下に掲載する。

A. はじめに

1. はじめに

玉川大学および女子短期大学では、学部改善活動を推進するための組織として、平成14年度より「大学FD委員会」を設置し、活動を開始しました。

委員会の目的は、① 玉川大学の教育理念をよりよく実践し、② 大学大衆化時代によりよく対応し、③ 21世紀に玉川教育を支える教授団として持続的な成長を遂げる、といったことを実現して、結果的に競争優位性を確保することです。

活動の内容は、各学部のFD活動の啓蒙ならびに支援、大学共通科目に関するFD活動、大学全体のFD活動記録の作成、研修会の開催などです。研修会については、平成14年度より「プレゼンテーション研修」を実施しております。この「しおり」は、「プレゼンテーション研修」についてご案内するものです。

2. 研修会実施の主旨

研修会実施は、大学FD委員会の活動の一部です。FD (Faculty Development) という言葉を直訳すると「教授団開発」となります。すなわち、教員個人の教授の開発を通じて学部全体としての教育の質を高めることが最終目的です。

この最終目標を達成するための最善の方法を見つけることはむずかしく、多くの大学で方法を模索しながら実践しているのが現状です。しかし、大学を取り巻く世の中の動向を見ると、FDの推進は急務です。そこで大学FD委員会では、教壇における講義方法の改善を目指して「プレゼンテーション研修」の実施に踏み切りました。「学問の最高学府」という意識にとじこもるのではなく、大衆化時代の教育を担っているのであるという発想の転換をしていただきたい。そして、何年かの間にすべての先生に一度はこの研修会に参加していただき、各自の教授方法の改善に生かしていただきたいと考えております。

B. 研修の概要

1. 到達目標

1. プレゼンテーション技法を身につけ、講義に生かす。
2. 聞き手が分かりやすい説明を行う。
3. プレゼンテーションを行う上での自分の欠点を知り、改善を図る。
4. 他人のプレゼンテーションを評価することによって、自分のスキル向上を図る。
5. 演習を通じて、お互いにコミュニケーションを図り、今後のFD活動に生かす。

2. 予定表

第 1 日目	第 2 日目
第 1 章. プレゼンテーションの基本 第 2 章. 視聴覚教材の使い方	第 3 章. 質疑応答の技法 演習 3. リハーサル 演習 4. 模擬授業 プレゼンテーション (2)
演習 1. 模擬授業 プレゼンテーション (2) 演習 2. 改善点の明確化と改善作業	第 4 章. まとめ 演習 5. アクション・プランの作成

3. 項目別内容

第 1 章：プレゼンテーションの基本（講義） [約 1 時間 3 0 分]

目的：教育の場におけるプレゼンテーションの重要性を認識し、基本的な技法を知る。

内容：講義はプレゼンテーションの一種であることから技法の重要性を説明する。
バーバル表現，ノンバーバル表現，話し方のマナーの 3 点から技法を説明する。

キーワード：プレゼンテーションの 3 要素，情的KR，バーバル表現，ノンバーバル表現，アイコンタクト，ジェスチャー，CUE

第 2 章：視聴覚教材の使い方（講義） [約 1 時間]

目的：提示資料の重要性を理解し、それぞれの作成法と使い方の技法を知る。

内容：黒板，OHP，PowerPoint，ポインター（指示棒）の使用法を説明する。

キーワード：配布資料と提示資料，効果的な画面，静止指示と動作指示

演習 1：模擬授業 プレゼンテーション(1) [約 3 時間 3 0 分程度]

目的：自分の教壇での講義を、客観的に観察し、自分の改善点を見つける。

内容：10分程度の模擬授業のプレゼンテーションを行う。
すべてビデオ撮影をし、各自視聴する。
聞き手は、学生の立場で模擬授業を評価する。

演習 2：改善点の明確化と改善作業 [約 2 0 分説明, 作業は自由]

目的：演習 1 における改善点を見つけ、改善作業を行う。

内容：自分で発見した改善点、他人から指摘された改善点などを総合的に判断し、明日までに改善できることの改善作業を行う（改善作業は解散後自由に行う）。

第 3 章：質疑応答の技法（講義） [約 4 5 分]

目的：講義を一方向的に行うのではなく、双方向のコミュニケーションのとり方を学ぶ。

内容：双方向のコミュニケーションを図る方法について、いくつかの技法を紹介する。
質問の回答方法、質問しやすい雰囲気作り、発問の仕方、話し方の工夫などを説明する。

キーワード：双方向コミュニケーション、質疑応答、発問、
自問自答型発問、カード式発問

演習 3：基本的な技法の演習（講義） [約 4 5 分]

目的：すぐに改善可能な技法の練習を行う。

内容：ドッグ・ワード、アイコンタクト、ジェスチャー、ポインターなどの演習を行う。

演習 4：模擬授業プレゼンテーション(2) [約 4 時間]

目的：改善した模擬授業を行い、自分の講義のよい点と改善点を明確にする。

内容：1回目と同様の方法で、模擬授業のプレゼンテーションを行う。
改善点を明確にし、宣言してから演習を行う。
聞き手の一人は質問係となり、質疑応答を行う。

第 4 章：まとめ [約 3 0 分]

目的：2日の総まとめとして、実際の授業に反映させるための心構えを持つ。

内容：学習効果を高めるための考慮点と心構えを説明する。
2日間で学習したことを、授業に生かすためのアクション・プランを作成する。

キーワード：準備性の法則、賞と罰の法則、繰り返しの法則、関連付けの法則

4.平成15年度

研修予定

4 - 1 . 日程

第1回目：平成15年7月30日（水）～31日（木）

第2回目：平成15年8月4日（月）～5日（火）

第3回目：平成15年9月10日（水）～11日（木）

第4回目：平成16年3月2日（火）～3日（水）

第5回目：平成16年3月16日（火）～17日（水）

5.受講の心構え

ご受講に当たり、是非積極的に取り組んでください。なかには、「上司から出席を強制された」などという理由で受講されるかたもいるかもしれませんが、どんな理由であっても、2日という時間を無駄にしてはなりません。主催者側も担当者も精一杯努力しますので、受講する皆様も、有益な時間にするように心がけてください。

そのためには、まず、ご自分自身を1歩でも2歩でも前進させることを目標にしてください。そして、何か少しでもヒントを掴み取ろうとしてみてください。

他人から、ご自分のプレゼンテーションについて評価されるのは気持ちのよいものではないかもしれませんが、しかし、どんな意見でも何かしら宝物になるようなものがあるに違いありません。感情的にならず素直な気持ちで受け入れてみてください。

また、この講座では教師間のコミュニケーションを円滑にすることも目的のひとつとしております。同じ学園の中で、同じ教育に携わりながら、名前も知らない教員同士も多いかと思います。是非この研修会を、意見交換の場として活用していただきたいと思ひます。

6. 事前準備のお願い

予定表のとおり、プレゼンテーションの演習として模擬講義を行いますので、下記要領にて事前準備をしてください。

記

テーマ：・実際の授業から抜粋した項目が望ましい

- ・それについて知らない人に説明し、理解させるような項目がよい
- ・自己紹介、授業や演習の仕方の説明、実習や演習はふさわしくない

時間：7分～10分

- ・人数と時間の関係で、途中でも10分で終わっていただく
- ・話を無理に10分にまとめたり要約したりする必要はない

ツール：自由、以下のツール単独または組み合わせ

- ・板書
- ・配布資料
- ・OHC
- ・PowerPoint など
- ・その他

演習の方法：

- ・一人ずつ模擬講義をし、それをビデオ撮影する
- ・2日目は1日目と同じ内容を、より改善して講義する

評価の仕方：

- ・3者の目（自分自身、他の参加者、講師）で模擬講義を評価する
- ・自分自身は、ビデオを視聴することによって自己評価する
- ・他の参加者は、評価用紙に記入することによって評価する
- ・講師は、口頭でコメントする

問合せ先（担当講師）：

- ・学術研究所 切田 節子（大学研究棟 423）
内線：8280 メール：skirita@lab.tamagawa.ac.jp

- ▶ **分かりやすい授業のためにずいぶん骨を折ったのに、試験をしてみると予想外に不出来だったという経験はありませんか？**

もちろん複数の原因があるでしょう。展開や説明の仕方などが悪いという少し深い原因の場合もあるかもしれませんが、意外とすぐに改善されることもあるものです。たとえば、声が小さくて聞こえなかったというような単純な原因です。いずれにしても、教師としては改善しなければならないものです。

この講座で自分自身のやり方を見直し、また他の人のやり方を参考にして、改善すべき点を発見してください。単純なことならば、明日から改善する努力をしませんか。

- ▶ **担当している選択科目の受講者が減少するのは、内容がむずかしいから仕方ないとあきらめてはいませんか？**

その選択科目は、その分野にとって極めて重要な科目のほずです。一人でも多くの学生に聴講してほしいし、それが学生の将来にも役立つはずで。それならば、どうして人気科目にする工夫をしないのでしょうか。

原因は、「難しい」ことにあるのではなく、「分かりやすさ」にあるのかもしれませんが。教授法のちょっとした工夫やアイデアで、理解度が向上し、いっそう興味深い魅力的な科目になるに違いありません。この講座で何かヒントをつかみ、ご自分の力で人気科目にしてください。

- ▶ **学生から直接、または間接的に「先生の授業は分かりにくい」というような声を耳にしたことはありませんか？**

それらの評価に耳をふさいだり、学生のレベルが低いせいにしてはいませんか。どんなに高尚ですばらしい授業であっても、その科目内容が学生の血となり肉とならなければ意味がありません。

「分かりやすい」ということは、決してレベルの低いことではありません。むずかしい内容を分かりやすく説明するために、どのくらい努力をしていますか。授業方法の工夫やヒントなどは、その気になって努力すれば何か得られるはずで。それが分かりやすさの改善につながるかもしれません。その何かをつかむためにも、是非受講をお勧めします。

D . Q / A 集

1. 研修の内容について

1-1. 研修の構成

1-2. 講義の内容

講義と演習はどんな割合で行われるのですか？

この研修は、演習を中心に行っています。講義は、全体の1/4程度で、残りはすべてプレゼンテーションの演習です。

どうして2日間という日程なのですか？

実施後のアンケートで「2日は長い」、「2日では短すぎる」と両極端のご意見をいただきますが、この研修会は2日間で運営いたします。

プレゼンテーションは、少なくとも2回以上の演習が必要です。1回目の失敗を2回目で改善することによって、改善法が身につくからです。1回のみでは、頭で理解するだけで実際の改善ができません。また2回目は、1晩おいて翌日に実施すると、より効果的だといわれています。そのために2日間の日程にしています。

もちろん、2日間ですべてが終わるわけではありません。2日の研修期間では、新しい技法を知り、改善点を発見し、その改善方法を知ることだけに終わるかもしれません。この研修の終了時点が、スタート・ラインだと考え、学習したことを研修終了後に実践してください。

講義の内容は、一般的なプレゼンテーション技法だけなのですか？

一般的なプレゼンテーション技法のほかに、教育の場で使用できるような種々の技法を盛り込んでいます。

たとえば、多人数の教室で効率的に小グループに分ける方法、聞き手との双方向のコミュニケーションを図る方法、その他、眠らせないために聞き手の動機付けを行う工夫など、時間のゆるす限り講義の中に取り込んでいます。ひとつ一つは、目新しい技法ではないかもしれませんが、それらを組み合わせて、魅力的な授業を行うためのヒントを得られるはずです。

ただ、何といたっても、教室での話し方がキーポイントになります。目の前にいる学生を引き付ける工夫が一番大切だという観点から、話し方の技法に重点を置いています。

PowerPoint やラーニング・スペース、新しい機器の使い方なども学べますか？

1-3. 演習の内容

プレゼンテーションの本質は、自分の持っている情報を分かりやすく正確に相手に伝えることであり、ソフトや器材を使いこなすことではありません。この研修では、1つの道具としてPowerPointや機器を利用しますが、使い方を教える講座ではないことをご理解ください。

ただし、PowerPointの効果的な画面の作成方法、文字の大きさ、背景や表紙のデザイン、動画の利用などについては、具体例を使いながら詳しく説明します。

演習は代表者だけすればよいのではないですか？

短時間ですが、全員に模擬授業の演習に参加していただきます。プレゼンテーション・スキルを向上させる方法は、スポーツと同じです。「わかっているのに、できない」というジレンマを克服するには、一にも二にも練習です。演習に参加しなければ、この研修は無意味といえます。

もちろん世の中には、練習しなくても上手な天才もいますし、技法さえ聞けば自分自身でスキルを伸ばせる人もいます。しかし普通の人には、まず先生について習うことをお勧めします。その後で、自分で復習し練習するとスキルが向上するものです。

したがって、この研修では、代表者に演習させるという方法ではなく、全員に演習していただく方法を取っています。講義だけ聴講したいという受講形態はお断りさせていただきます。

演習は、どんな形式で行うのですか？

発表は、すべてビデオ撮影し、いろいろな立場で評価されます。まず、ご自分の講義の様子をご自分の目と耳で、聞き手（学生）の立場になって視聴してみてください。

指導者からは口頭で、他の受講者全員からはメモでコメントを受けます。つまり、模擬授業は、「自分」、「指導者」、「聞き手」の3つの立場から観察され、評価されることになります。

ビデオ・テープは研修終了後にお渡しいたします。すこし時間を経てから再度ご自分の姿を視聴されることをお勧めします。

指摘されたことを、すぐに改善できるのですか？

ビデオを見て自分で気づいた点、他人から指摘された改善点を、総合的に判断し、まず大きく次の3つに分類していただきます。

- a. すぐに改善できること
- b. 長期的に改善すべきこと
- c. 改善しないこと

2. 受講の意義

2-1. 受講のメリット

すぐに改善できる欠点 a. よりも、長期的に改善しなければならないこと b. の方が多いかもしれません。実際に「くせ」を直すには、長い時間がかかるものです。この研修で気づいた改善点を、ご自分の授業の中で少しずつ改善の努力をしなければ、本当の意味での受講の効果は得られないということです。

また、他人から指摘された点でも、「改善するべきではない」あるいは「改善の必要がない」と判断することもあるでしょう。指摘されたすべてを受け入れる必要はありません。ただ、一度は素直にすべてのコメントに耳を傾けてみてください。そしてそれでも考えが変わらなければ、c. に分類してください。

ただ a. に当てはまることもたくさんあります。たとえば、姿勢やアイコンタクト、あるいは声の大きさや文字の大きさなど、基本的なことは比較的簡単に練習して改善することができるものです。それらのことは、研修期間中に改善するように努力してください。改善の方法が分からない場合は、講義中に遠慮なく質問してください。

研修を受講することは、どんなメリットがあるのですか？

受講は、FD活動をしているという1つの記録になります。

たとえば、教職課程の認定を申請する際には、担当教員の調書を文部科学省に提出します。その書類には、教育方法に関する研究ないし教育改善活動について記載する項目があります。後者の項目には、FD活動、授業評価などについて当該教員の実施記録を記載するようになっています。

この例からも分かるように、各種の書類で、FDに関する項目が増えていくと思われれます。そのためにも、講習会の受講だけでなく、他のFD活動への参加も積極的に取り組んでください。

今後、評価の対象になる可能性があるのですか？

受講したからといって、即、人事的な評価を得られるものではありません。また、評価の対象になるから受講する、というような姿勢は、本当の意味での受講とはいえません。しかし大学での教育は、今まで客観的な評価されてきていないことも事実です。

今まで、教壇に立つための技法を習ったことがありますか。多くの教師は、特に訓練を受けることなく教壇に立っているのではないのでしょうか。もちろん、自分なりに努力しているのは当然ですが、それだけでは客観的な評価ができません。

今後、教育界はビジネス界同様、競争原理が適用されると言われています。新聞報道にもあるように、すべての大学は、今後第三者評価を受けなければなりません。このような時代には、客観的な基準が求められるものです。この講座の受講は、第三者に評価されるための第一歩と考えてください。

受講すると、学生の気持ちが理解できるのでしょうか？

教室で学生の席にすわってみると、いろいろと感ずることがあるはずです。日頃「相手の立場に立つように」と学生に教えていながら、実施するのはむずかしいものです。この機会に、学生の立場に戻り、改めて自分の講義の質を客観的に眺めてみてください。改善するべき点を見つけることができますと思います。

その他、何かメリットがありますか？

学内での人間関係の幅を広げます。同じ教室で机を並べて2日間受講するという事は、クラス・メートになることです。この機会に、他学部・学科の教師間での交流を図ってください。FD活動は、個々の教師の能力を伸ばすことだけでなく、集団としての能力開発も意味しています。他の教員と、教え方のノウハウをシェアすることも、教授団 (Faculty) の一員として意義あることだと思います。

すぐに効果が現れるのでしょうか？

残念ながら、「プレゼンテーションに王道なし」です。誰もがすぐに上手になるような即効薬も技法もありません。

語学やスポーツ、どんなスキルでも努力なしには上達しません。ただ同じ努力をするなら効率的にしたいものです。近道はありませんが、廻り道をする必要もありません。この講座でヒントをつかめば、効率的に上達のための努力をすることができます。

教育で大切なのは、技法よりも心がけではないのでしょうか？

もちろん、教育の場で大切なのは、テクニックより心だと言うのは確かです。しかし、だからといって「技法」を軽視してよいことにはなりません。

日常生活を考えてみても、ときには技法や形式が心を支えることがあるのではないのでしょうか。たとえば、どんなに感謝の気持ちに満ちていても、笑顔と「ありがとう」の言葉がなければ、相手には通じないものです。心と形は相乗効果によって、効果を発揮するものだと思います。

この研修では、種々の技法を教壇で試していただきます。ご自分に合った技法を見つけて実際の授業に応用してみてください。きっと、ひと味違った授業の運営ができるでしょう。

技法を手取り足取り，懇切丁寧に教えてくれるのですか？

この研修で目指しているのは、融通性のあるプレゼンテーション技法が身につくことです。そのため、細部までのコメントは控え、自ら欠点や長所を発見していただくことを心がけています。指導者は、山登りのガイドのような役目をします。道を間違えたり、崖から落ちそうになったりしたときには注意しますが、手を引いていくようなことはしません。あくまでもご自分の足で歩いていただきます。

教育の場で大切なのはワンパターンのプレゼンテーションではなく、ご自分らしい個性豊かなプレゼンテーションです。

その他，どんな効果がありますか？

ご自分の授業に自信をもっていますか？この機会に、ご自分が行っている授業の方法を他人に評価してもらって、よいものは、よいものとして自信を持っていただきたいと思います。きっと、ご自分の授業に自信が持てるに違いありません。

3 . 新任教員研修

平成 15 年度採用の新任の助手以上の教員に対し、2 日間の日程で研修会を実施した。この研修会は天城研修にて提案があり、実施の運びとなった研修会である。参加者 10 名（この他 2 名は都合により 3 月 24 日に実施）で、2 日間の日程で行われた。

日 時：平成 15 年 3 月 27 日（木）～28 日（金）10:00～17:00

場 所：経営学部校舎 204 教室

対 象：平成 15 年度採用の助手以上の新任教員

研修目的：玉川学園の建学精神，玉川大学の教育理念・教育方針に対する理解を求め，専任教員としての業務を支障なく遂行できるよう，また新しい時代に向けた学園の発展に貢献していただけるよう協力を求める。

研修プログラム：下記参照。

【3 月 27 日（木）】

時間	内 容	資 料	担 当
10:00	玉川の教育理念と教育方針		学長
10:30	映画「新教育の開拓者—小原國芳」	C D	教務課長
11:10	休憩		
11:20	玉川大学の概要，専任教員の業務（各種運営担当，担任業務，教務指導・学生指導等）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 組織図 ・ 平成 14 年度大学運営組織 ・ 学生指導要項 ・ 各種会議体 	教学部長
12:10	昼食（大学研究室棟ラウンジ）		
13:00	玉川学園の組織機構と関連する業務 研究費と出張（国内外）の手続等について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 組織図 	教学部 事務部長
13:30	年間授業計画，カリキュラムの概要，学則・規程等（ノーツ掲示板の利活用，授業，休講，補講・試験，シラバス，成績等）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 平成 15 年度学生要覧 ・ 始業にあたって（専任用） 	授業運営課長 学務課長
15:00	教育博物館・小原記念館見学		教育博物館
16:30	校歌紹介	校歌，楽譜	芸術学部 江口正之教授
16:40	質疑応答		教学部長 教務課長

【3月28日（金）】

時間	内 容	資 料	担 当
10:00	研究者情報システムについて	操作手順書	教務課長
11:00	講義： ・プレゼンテーションの重要性 ・授業におけるプレゼンテーション技法	・プレゼンテーション研修の しおり ・プリント	学術研究所 切田節子講師
12:00	昼食（大学研究室棟ラウンジ）		
13:00	演習：プレゼンテーション ・テーマの選定 ・ストーリーの組み立て	・プレゼンテーション研修の しおり ・プリント	学術研究所 切田節子講師
14:00	・準備 ・発表 ・評価		
15:30	質疑応答		
15:40	クロージング		
	(休 憩)		
16:00	玉川大学におけるFD活動の現状 ・大学FD委員会 ・学部FD委員会 ・学生による授業評価	・FDパンフレット	大学FD委員 会委員長

参考資料 1 . 大学 F D 委員会規程

(平成 15 年 4 月 1 日 制定)

(目的)

第 1 条 玉川大学・玉川学園女子短期大学(以下「本大学」という。)教員の教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い,その質的充実を図ることを目的として大学 F D (ファカルティ・ディベロップメント)(以下「F D」という。)委員会(以下「本委員会」という。)を置く。

(組織)

第 2 条 本委員会は,委員長並びに委員,アドバイザー及び事務担当をもって構成する。
2 前項の委員長及び委員等は,毎年度当初,学長がこれを委嘱する。
3 学長が必要と認めたときは副委員長を置くことができる。
4 本委員会には学部ごとの部会を設けることができる。
5 前項による部会は,各学部及び短大ごとに設け,部会のまとめ役及び委員は学部長が選任する。

(任期)

第 3 条 委員の任期は 1 か年とする。ただし,再任を妨げない。

(運営)

第 4 条 本委員会は,委員長が招集・開会し,議長となる。
2 委員長が必要と認められた場合は,委員以外の教職員の出席を求め,意見を聴取することができる。

(審議事項)

第 5 条 本委員会は,次の事項を審議する。
(1) 教育研究活動改善の方策に関する事項
(2) 初任者及び現任者の研修計画の立案・実施に関する事項
(3) 学生による授業評価の実施,結果分析及びフィードバックに関する事項
(4) F D に関する教員への各種コンサルティングに関する事項
(5) 教員の F D 活動の指針に関する冊子及び F D 活動報告書の刊行
(6) 部会からの報告・審議に関する事項
(7) その他 F D に関連する事項

(部会)

第 6 条 各部会は本委員会に検討・実施事項を報告しなければならない。

(答申)

第 7 条 委員長は,本委員会の審議結果を学長に答申しなければならない。

(実施事項の決定)

第8条 前条の答申内容の実施については，大学部長会の議を経て学長が決定する。

(実施事項の運用)

第9条 前条により決定した実施事項に関する実際の運用に関しては，教務委員会及び教育研究活動等点検調査委員会との調整を図りながら検討，実施するものとする。

(事務局)

第10条 本委員会に係る事務主管は，教学部及び教育調査企画部が行う。

附 則

この規程は，平成15年4月1日から施行する。

参考資料 2 . 大学 F D 委員会の議事要旨

第 1 回大学 F D 委員会議事要旨

日 時：平成 14 年 5 月 9 日（木）17:00～20:50

場 所：教学事務棟 150・151 会議室

出席者：(委員長)後藤昌彦，(副委員長)松香光夫，
(委員)藤田裕二，山本庸介，菊池重雄，中村慎一，(アドバイザー)切田節子，
(事務担当)稲葉興己，齊藤文則

欠席者：(委員)田中義郎，林 卓行 (敬称略)

議 案：

- (1)大学 F D 委員会について
- (2)各学部 F D 状況報告について
- (3)他大学における F D 活動報告について
- (4) F D 研修会について
- (5)大学 F D 委員会予定について
- (6)報告

議事要旨：

はじめに会の開催にあたり，各委員等の自己紹介を行う。続いて後藤委員長より本委員会の趣旨等について(1)の通り説明がある。

(1)大学 F D 委員会について

- ・ 本委員会は玉川大学及び短大教員の教育研究活動の向上・能力開発に関して，全学的な観点からの検討を恒常的に行い，その質的充実を目的とする。
- ・ その活動内容は
 - 教育研究活動改善の方策に関すること。
 - 初任者及び現任者の研修計画の立案・実施に関すること。
 - 学生による授業評価の実施，結果分析及びフィードバックに関すること。
 - F D に関する教員への各種コンサルティングに関すること。
 - 教員の F D 活動の指針に関する冊子及び F D 活動報告書の刊行部会からの報告・審議に関すること。
 - その他 F D に関連すること。
- ・ 資料 p2～3 の委員会会則案については，公的な位置付けではなく，今年度の委員会を運営する上での要旨として位置づけにしたい。したがって，案のままでの運用をしたい。
- ・ 本委員会の位置付け，規程化等については今年度の様子を見ながら，15 年度に向けて検討して行きたい。

- ・ ただし、本委員会は学長をはじめ、教務委員会や大学部長会でも審議の上、正式に了承されているものであり、FD活動をするということについては大学として承認されている。
- ・ 本委員会の呼称については資料 p1 の通り「大学FD委員会」とし、各学部においては「大学FD委員会 学部会」(は学部名)とする。<資料 p1 参照>

(2)各学部FD状況報告について

- ・ 13 年度に調査した各学部のFD実践状況を参照し、今年度についても現在及び今後の予定を学部単位でまとめることとする。
- ・ 調査にあたっては、後日、事務局より改めて各委員へ依頼をする。
- ・ 各学部のこれまでのFD実施状況を資料にしたがって報告する。
(内容は資料の通り、省略)
- ・ FD活動の進展状況については、学部間でのバラツキがあるため、大学全体としての組織的なFD活動に対処することを考えると、学部の事情に配慮しつつも、足並みを揃えるようにする。

(3)他大学におけるFD活動報告について

- ・ 切田アドバイザーより、平成2年～13年に亘る金沢工業大学での事例をもとに、FD活動の実施指導体験やその効果、成功要因などについて報告。

(4)FD研修会について

- ・ 本学においても「プレゼンテーション研修」として教員対象の研修会を実施する。
- ・ 第1回を7月23日(火)～24日(水)、第2回を7月29日(月)～30日(火)とする。
- ・ 時間は9:00～17:00または9:30～18:00とする。
- ・ 受講については、各学部からそれぞれの回に2名ずつの教員を選出する。次回の委員会までに間に合うように、選出いただく。
- ・ 選出の検討に際しての資料として、切田アドバイザーより「講座内容の説明」「講座出席者への事前準備の依頼」等を各委員へ送付する。

(5)大学FD委員会予定について

- ・ 次回開催を6月21日(金)17:00～、教学事務棟150・151会議室とする。
- ・ 以降の検討内容として
 - FD研修について
 - 学生による授業評価の実施について(全学的観点から)
 - その結果の学内公開について
 - 授業の内容・方法の改善を図った教員に対する評価について
 - 教員の教育業績評価の対象項目について(導入に関しては別の委員会で検討)

以上

第2回大学FD委員会議事要旨

日 時：平成14年6月21日（金）17:00～20:40

場 所：教学事務棟150・151会議室

出席者：(委員長)後藤昌彦，(副委員長)松香光夫，
(委員)藤田裕二，山本庸介，菊池重雄，佐藤隆之，林 卓行，中村慎一，
(アドバイザー)切田節子，
(事務担当)稲葉興己，齊藤文則

(敬称略)

議 案：

- (1)プレゼンテーション研修会について
- (2)各学部のFD実態調査について
- (3)FD活動計画について
- (4)平成15年度教員短期海外研修計画について
- (5)平成14年度天城研修について
- (6)報告
FD委員会委員メールアドレス
第1回FD委員会議事要旨

議事要旨：

はじめに、後藤委員長より次のような発言があった。本学におけるFD活動は、いままでも高い目標を掲げて教育の質の向上を図ってきている。さらにこれからは、多面的な強化をして行きたい。

大学FD委員会は各学部のFD活動と連携を図りながら、全学的な視野での活動を実施するものであること。また、学生による授業評価においては、評価をするだけに終わらず、必ずや改善に向けて、活動を推進するものである。などの目標を確認する。

(1)プレゼンテーション研修会について

- ・各学部学科で参加者（第1回2名，第2回2名）が未定については、引き続き選出を行い、教務課まで連絡願いたい。（教務課：稲葉 8801 まで）
- ・研修会への参加者に対する事前情報はこの会議資料（p2～3）の他、当日の詳細なタイムテーブルを作成（切田アドバイザー）して事前に渡す。
- ・当日の昼食は用意することで検討してみる。後日、お知らせする。

(2)各学部のFD活動実態調査について

- ・7月の教育研究活動等点検調査委員会（7/23）に資料として、使用したい。
- ・内容等に訂正があれば、連絡願いたい。（学校調査課：齊藤 8899 まで）
- ・年度末に再度、調査をして今年度の活動内容としてまとめたい。

(3)FD活動計画について

- ・ 委員会の目的や具体的な活動について検討する。
 - ・ 大学F D委員会（仮称）の目的
 - 全学にまたがる教育活動の改善について審議・研究し，その啓蒙活動・広報活動・環境整備などを行う。
 - 全学的な視野でF Dに係る調査・研究・審議を行い，各学部の教育改善活動が組織的に活発に実施されるよう支援する。
 - ・ 大学F D委員会（仮称）の具体的な活動内容
 - F Dに関する啓蒙活動をする。（冊子等の作成，講演会の開催）
 - 講演会などでは，教授法やI T利用法についても内容に含めたい。
 - 教員の職責に係る啓蒙活動をする。
 - 教授方法の研修会を開催する。（プレゼンテーション研修）
 - 教員の教育活動に関する総合的評価方法の検討をする。
 - 新任教員の研修をする。
 - 学外の教員研修会等への教員派遣（参加）をする。
 - 全学共通科目の学生による授業評価を実施する。
 - 全学をまとめたF D活動報告書を作成する。
 - ・ 教授方法の研修会（プレゼンテーション研修）についての実施は，具体的になっているが，その他については実施の時期も含めて，今後の検討とする。
- (4)平成 15 年度教員短期海外研修計画について
- ・ 従前の短期海外研修を海外におけるF D研修制度とし，教育改善としての目的で直接に教育へ還元させることを狙いたい。
 - ・ 6月の大学部長会で承認を得たい。（この時点では，まだ，未定である。）
 - ・ 結果については後日連絡する。
- (5)平成 14 年度天城研修について
- ・ 7月24日(水)～26日(金)にF Dについて研修をする。
 - ・ メンバーは本委員会の委員となる。
 - ・ 事前にセッションのレクチャーを実施。7月23日(火)10:00～10:40とする。
 - ・ 場所等については後日連絡する。
- (6)報告
- F D委員会（仮称）委員一覧
- 委員間の連絡に便利となるようメールアドレスの一覧も加えている。一部訂正を必要とするため，訂正したものを後日配布する。

大学F D委員会予定について

- ・ 次回開催については別途連絡する。
- ・ 以降の検討内容として
 - ・ 天城研修より
 - ・ F Dの具体的な活動

学生による授業評価の実施について（全学的観点から）

その結果の学内公開について

授業の内容・方法の改善を図った教員に対する評価について

教員の教育業績評価の対象項目について（導入に関しては別の委員会で検討）

以上

第3回大学FD委員会議事要旨

日 時：平成14年9月17日（火）10:00～12:50

場 所：教学事務棟150・151会議室

出席者：(委員長)後藤昌彦，(副委員長)松香光夫，
(委員)山本庸介，菊池重雄，佐藤隆之，林 卓行，中村慎一，
(アドバイザー)切田節子，
(事務担当)齊藤文則
(欠席者)藤田裕二，稲葉興己

(敬称略)

議 案：

- (1) 平成14年度天城研修におけるMust Doの確認について
- (2) FD活動のパンフレット作成について
- (3) FDに関する講演会の開催について
- (4) 報告
・プレゼンテーション研修会について

議事要旨：

はじめに，後藤委員長より議案の順番を(1),(3),(4),(2)の順に進めたいと提案され一同了承する。

- (1)平成14年度天城研修におけるMust Doの確認について
 - ・ 資料4ページの「5.解決策の策定」を確認する。
 - ・ 1.教員に対してFD啓蒙冊子を製作し，説明会を実施する。
 - ・ 2.学部長の責任においてFD活動を推進する。
 - ・ 3.教員に対する啓蒙活動を行う。
 - ・ 4.授業評価の目的・理念については，大学FD委員会で継続審議し，その結果を学部にフィードバックする。
 - ・ 以上のことを必ず推進していくことで，一同確認し，了承する。
 - ・ 大学FD委員長である教学部長から，大学部長会において各学部長へ活動推進の働きかけを発言してもらい，それをひとつのきっかけとしたい。
 - ・ FD委員からも可能なら大学部長会前に学部長へそれとなく話しておいてもらいたい。
- (2)FD活動の一環としての講演会開催について
 - ・ 講演者は，高等教育研究所主幹である喜多村和之氏を考えている。
 - ・ 日本私立大学協会主催の協議会で同氏の講演を聞いた。その後，日本開発構想研究所のセミナーの際に，後藤教学部長が本学での講演を依頼したものである。
 - ・ この講演会には全教員の出席を望む。また，職員についても可能な限り出席を願いたい。
 - ・ 日時については，12月18日，19日，2月下旬～3月のあたりで検討したい。

(3) プレゼンテーション研修会の報告について

- ・ 研修全般に対して受身的な姿勢から、不満を感じている人がいたように思われた。
- ・ 今回は急に研修に参加するように依頼があったり、途中の連絡等の徹底が悪かったり、また、この研修の意義を知らないまま進行していたなど問題点があったので、次回は改善していきたいものである。具体的には、
- ・ 開催日程の不具合による不満。
- ・ 諸連絡等の事務手続きの不具合による不満。
- ・ 日程の変更通知が不徹底であった。変更点の表現に工夫をすることで、解消できるのではないか。
- ・ 開催場所への要望。研修時間以外における参加者の情報交換場所の設置など。
- ・ 問題点など今後徐々に改善しながら、研修を推進していく。

(今年度の次回開催について)

- ・ 場所としては、経営学部校舎のプレゼンルームなども可能である。ラウンジ等も使用できるので施設的な問題は改善できる。
- ・ 開催日時は、喜多村先生の講演会との関連も考慮する必要があるが、予定としては次のように実施できるかどうか検討する。
 - 12月19日～20日または12月20日～21日の一回
 - 3月17日～18日および3月19日～20日の二回
- ・ 次回開催に参加する件については、教学部長から学部長に報告し、学部長主体のもとに参加者が選出される。
- ・ 芸術学部では、講義形式では適さない教員もいる。強制参加については検討を要すると意見が出された。

(4) F D活動のパンフレット作成について

- ・ 本文は1～2ページで後は参考資料である。
- ・ 以降、資料を参照しながら山本委員が説明した。
- ・ 作成のコンセプトは、
 - 言われてやるより、自主的にやることで楽しいものだという意味づけたい。
 - F D活動は日常的な活動であって、構えてやるような大げさなものではない。
 - 計画的に、継続的に進めていくことが大切である。
 - 過剰反応はよくない。アセスメントが大切である。
 - 授業評価の実施には人と経費がかかる。
 - 授業評価だけがF D活動ではない。
- ・ 活動の目的は、
 - 玉川大学の教育理念を実現し、よりよく実践する。
 - 大学大衆化時代によりよく対応する。
 - 21世紀の玉川教育を支える教師団として持続的な成果を遂げ 結果的に競争優位性を玉川大学が確保する
- ・ 大学F D提案計画書、玉川大学F D改善効果評価書の提案については、今回の啓蒙パン

フレットに含めない。

- ・ 表 2 から本文をはじめる。 1 ～ 2 ページは見開きにする。
- ・ 連絡先の表示を入れる。
- ・ パンフレット案における細部の訂正等について意見があったが，ここでは省略。
- ・ 以降，訂正されたものを大学部長会にて審議，その後印刷して各学部にて配布することで計画する。

大学 F D 委員会予定について

- ・ 次回開催は，10月31日（木）18：00～とする。

以上

第4回大学FD委員会議事要旨

日 時：平成14年10月31日(木)18:10~20:30

場 所：教学事務棟150・151会議室

出席者：(委員長)後藤昌彦，(副委員長)松香光夫，
(委員)藤田裕二，山本庸介，菊池重雄，佐藤隆之，
(アドバイザー)切田節子，
(事務担当)稲葉興己
(欠席者)林 卓行，中村慎一，齊藤文則

(敬称略)

議 案：

- (1) FD冊子の配布及び活用に関する件
- (2) プレゼンテーション研修会等の日程に関する件
- (3) シラバスの内容改善に関する件
- (4) 報告
喜多村和之氏の講演日程について
学部長セミナーについて
研究者情報システム導入について

議事要旨：

はじめに、後藤委員長より出席委員が少ないため、議案の順番を(4),(1),(2),(3)の順に進めたいと提案され一同了承する。

(4)報告

喜多村和之氏の講演日程について

- ・ 4月1日の教職員の集いにおいて実施したいということになっている。
- ・ 経営学部は2月か3月に学部独自の講演会を計画していたが、それを4月1日の前記講演に振りかえることで良いか確認があり、了承した。

学部長セミナーについて

- ・ 9月24日の大学部長会終了後、学部長にFD冊子を配布し、FD活動に関するお願いをした。
- ・ セミナーというほどではないが、約40分間説明やお願いをした。
- ・ その後学部長から、学部教員に対してFDに関する連絡や報告が何かあったか質問があった。農・経営学部は何もなく、教育学部は学科会で学部長から冊子の説明があったと報告があった。

研究者情報システム導入について

- ・ モニターを通してシステムの概要説明があり、現在データ入力を各教員にお願いしていると報告があった。本システムを利用し研究者情報を外部公開することは、広義でのF

D活動の一環であり、学術研究所からの観点ではTLOに有効である説明があった。

(1) F D冊子の配布及び活用に関する件

- ・ 冊子の配布日程について、人間学科会、国際言語文化学科会の開始時間を17:00から15:00に、経営学部国際経営合同学科会（11月14日）を経営学部教授会（11月21日）に別紙資料の一部訂正があった。
- ・ 冊子の説明は学部長からの説明とし、学部長に一任する。
- ・ F D委員は別紙資料のP. 9, 10を中心に冊子の説明をする。
- ・ 経営学部は3月に教員研修会を実施する予定。これには非常勤を含むが自由参加とする。ポイントは非常勤にどうやってF D活動の理解を求めて行くか。Native教員に対しては、冊子を英訳することを考えている。別紙資料P. 9, 10の文章を英訳することを事務局で検討すること。
- ・ 各学部のF D活動の進捗状況表を作成したい。学部のあるべき姿、具体的な施策、達成時期、達成度評価法を提出してもらいたい。その中間報告として、1月14日の教育研究活動等点検調査委員会までに原案を提出することとする。そのために、F D委員が学部長と話し、学部で議論をすること。
- ・ 国際言語文化学科は今年度春学期に授業評価を実施したが、冊子は作らずHPで公開する予定である。
- ・ F D活動に関するHPの基本方針としては、F D冊子のP. 1の内容、F D活動の進捗状況、各学部のF D活動を掲載することとし、学外への公表は、できるだけ早く行う。
- ・ 次回F D委員会にて、HP公開について議論する。まず、工学部が公表しているものを見てもらいたい。
- ・ 新規採用の非常勤に対し、契約時にF Dセミナーをやってもらうということを盛り込む必要がある。
- ・ 授業評価は全科目について実施するのか質問があり、やらなくても良いということではなく、全員参加を原則とする旨の回答があった。音楽・体育等の実技科目については、科目担当者にとりやたらよくなるのか考えてもらう必要もある。
- ・ 文学部では次年度に50万円の予算でF Dを実施するよう言われているが、学部の研修に教員を派遣してもいいのか質問があった。経営学部では既に実施しているという発言があった。
- ・ 外部のF D研修会の情報が学部に入りにくいいため、教務課より各F D委員に開催案内や情報を回すこととなった。

(2) プレゼンテーション研修会等の日程に関する件

- ・ 第3回～第5回の研修日程は、前回委員会での案及び別紙資料のとおりであることを一同確認した。
- ・ 参加者の選出、研修会の概要及び事前準備について、は別紙資料のとおりであることを一同確認した。
- ・ 新任教員研修については、玉川の教育を理解してもらうことを目的とするが、時間の関

係から結論は先送りとする。

- ・ これまでの研修会で参加者より，期待していたものと違うという意見があったため，プレゼンテーション研修 - 受講の勧め - を作成した。これを事前に配布したいが，教員としてこれを読んだらどう思うのか意見をメールで欲しいという提案があった。

(3) シラバスの内容改善に関する件

- ・ シラバスの内容改善については語学のシラバスが気になる部分があるという意見があったが，詳細は教務委員会で検討することで一了承した。

大学FD委員会予定について

- ・ 次回開催は，12月18日（水）13：00～15：00とする。

以上

第5回大学FD委員会議事要旨

日 時：平成14年12月18日(水)13:00～16:30

場 所：教学事務棟150・151会議室

出席者：(委員長)後藤昌彦，(副委員長)松香光夫，
(委員)山本庸介，菊池重雄，佐藤隆之，林 卓行，中村慎一，
(アドバイザー)切田節子，
(事務担当)稲葉興己，齊藤文則
(欠席者)藤田裕二，

(敬称略)

議 案：

- (1) プレゼンテーション研修会に関する件
- (2) 授業評価集計作業の外部業者に関する件
- (3) FD関係HPに関する件
- (4) 報告
・各学部FD活動計画の中間報告

議事要旨：

はじめに、後藤委員長より議案の順番を(4),(1),(2),(3)の順に進めたいと提案され一同了承する。

(1) 各学部FD活動計画の中間報告

(経営学部)

- ・ 今年度の3月に「経営学部教員研修会」を計画している。
- ・ 専任，非常勤，兼任教員を対象として考えている。参観は可能。
- ・ 目的としては，日本における大学教育のあり方・大学教育の役割を理解し，再確認する。
玉川大学にある経営学部としての教育方針と役割を再確認すること。教務や学生指導の観点からそのルール等を再確認し，規則に精通すること。などがポイントとなる。
- ・ 研修プログラムについては会議資料参照。
- ・ 経営学部の設置時に目標として決めていたことをあらためて確認する。
- ・ 1年次教育の検討。
- ・ その他資料のとおり。

(工学部)

- ・ 今までどおり継続して推進する。
- ・ 改善活動についてFDの観点から見直しする。FD提案計画書，効果評価書を使用していく。
- ・ 教育方法の改善では，特に学生の自学自習の啓蒙活動について推進，学生の付加価値やその測定方法について検討などがあげられる。

- ・ 研究の活性化。
- ・ 学生の勉学環境の改善。
- ・ 詳細は工学部自己点検ニュース 18表3を参照。

(農学部)

- ・ 学生による授業評価の実施に向け検討している。
- ・ 後日、FD活動としてまとめたものを教学部長(教務課)へ提出。

(芸術学部)

- ・ ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジから教員が来日。芸術学部の教育活動について教育工学の視点でレクチャー。講評会への参加。
- ・ 学生による授業評価をWEB上で実施。教員個々の設問も設定可能とする。1月の実施として進行している。
- ・ 後日、FD活動としてまとめたものを教学部長(教務課)へ提出。

(教育学部)

- ・ 学生による授業評価の実施に向け検討。
- ・ シラバスの作成, 授業計画について検討。
- ・ インターシッププログラムの検討。
- ・ オムニバス方式の授業導入について検討。
- ・ 教育実習, 参観実習への参加について検討。

(女子短期大学)

- ・ 女子短期大学としては組織的な活動より, 教員個々が継続性を持たせた活動をしていることが実情である。
- ・ 後日、FD活動としてまとめたものを教学部長(教務課)へ提出。

(2) プレゼンテーション研修会に関する件

- ・ 各学部2名の参加を募集しているが, 1名の学部もある。できるだけ2名の参加を推進したい。
- ・ 現実, 努力はしているがなかなか2名とならない場合もあるので, 何か工夫を試みてはいかがか。
- ・ 今年度はこの各学部2名として決定したことなので, このまま3月についてもすすめる。
- ・ 次年度は年間5回の開催として, 各学部から1名とすることで計7名とすることはどうか。
- ・ いずれにしても, 基本は全専任教員が受講するという目的となっていることを再確認したい。
- ・ 「プレゼンテーション研修 受講の勧め」の構成について, まず, 最初に研修の内容がどのようなものなのかを記載して, 説明することがこの冊子を有効なものにしていくのではないか。具体的な内容が提示されることで, 教員もさらに理解をやすく, 理解の深いものになると考えられる。
- ・ この冊子の最初の作成目的が, 研修会参加教員への補助的な説明としていたことから,

現在の構成となっている。

- ・ ということから，この冊子を読むことで研修会のことすべて理解されるようなものを目的とするなら，改訂をすることで進めたい。

(3) 授業評価集計作業の外部業者に関する件

- ・ コア ， 科目の学生による授業評価を進めるために，外部業者へその作業を委託する方法を提案。その作業工程，費用の見積りについて説明する。
- ・ 業者としては費用の安い教育ソフトウェアへ依頼することで，一同了承。
- ・ 工学部より自前で実施した場合の作業工程表が参考資料として提出される。

(4) F D 関係 H P に関する件

- ・ F D に関する情報を本学ホームページより配信。
- ・ 現在，工学部がその実施活動について要約したものを公開している。
- ・ どのように情報公開していくか今後の検討とする。

今回の提出課題

各学部の F D 活動について，とりまとめたものを教学部長（教務課）まで至急提出する。

大学 F D 委員会予定について

- ・ 次回開催は，各委員と調整しての開催とする。

以上

第6回大学FD委員会議事要旨

日 時：平成15年3月6日（木）10:00～12:40

場 所：教学事務棟150・151会議室

出席者：(委員長)後藤昌彦，(副委員長)松香光夫，
(委員)藤田裕二，山本庸介，菊池重雄，中村慎一，
(アドバイザー)切田節子，
(事務担当)稲葉興己，齊藤文則
(欠席者)佐藤隆之，林 卓行

(敬称略)

議 案：

- (1) 平成15年度実施コア科目の授業評価アンケートに関する件
- (2) 新任教員研修会に関する件
- (3) 平成14年度大学FD委員会活動報告書に関する件
- (4) 報告

議事要旨：

- (1) 平成15年度実施コア科目の授業評価アンケートに関する件
 - ・ 実施要領にて説明がある。
 - ・ 工学部で実施しているマークシートを利用する。
 - ・ シートの回収，処理，結果の返却等の作業を教学部で行う。
 - ・ コア 科目はその特性から，今回のアンケートの質問事項になじまないのので全人教育論以外は全学的実施の対象外とする。
 - ・ ただし，特定学部の学生対象に可能であると判断できるものは実験的に実施してみることは可とする。
 - ・ 平成15年度は春・秋学期の2回実施とする。
 - ・ 集計後の結果については，個々の評価を公表することはせず，統計的な取扱をしたものを公開する。
 - ・ 実施の際は，その実施目的を教員や学生に明確にすることが適切と考える。たえず確認しておくことが重要と思う。
 - ・ 実施に関しては，外部の業者に委託する方法を計画している。
 - ・ すでに，専門科目を学部で実施している際にコア 科目を含んでいる場合，学部の実施対象科目から除く。
 - ・ 専門科目は学部で実施，コア科目は教学部で実施となると実施時期が同時期でもあり，その実施方法が違ふことから教員が混乱することも予想される。その改善策は検討するべきではないか。
 - ・ 学部で実施の授業評価アンケートも教学部等が係わることで担当教員の負担を軽減できないか検討願いたい。

- ・ 教学部の人員の問題，実施に係る予算計上，補助制度の観点から検討する。

(2) 新任教員研修会に関する件

- ・ 平成 15 年度採用の新専任教員を対象に実施する。非常勤講師は含まない。
- ・ 期間は平成 15 年 3 月 27 日～28 日の 2 日間となる。
- ・ 学長主催で運営は教学部で，各部処の協力を得ながらの実施となる。
- ・ 今後，非常勤講師についても，その実施方法等含めこのような研修を実施できるように検討すべきではないか。
- ・ 非常勤講師については，学部長の対応でお願いしたい。方法は学部長に一任。

(3) 平成 14 年度大学 F D 委員会活動報告書に関する件

- ・ 14 年度の活動を報告書として小冊子にまとめ学内に配布する。
- ・ 3 月中に構成をまとめ 4 月下旬までには発行をしたい。
- ・ 構成が決まれば，それに従い原稿の書き直し等を各委員に依頼する。
- ・ 構成等は事務担当が委員長に提案する。

(4) 報告

第 3 回プレゼンテーション研修会報告

- ・ 研修後のアンケート調査で，研修内容を改善，事前に「しおり」の学習などの効果があったのか，1・2 回の参加者に比べて，満足度が高い結果となる。
- ・ 技法習得をテーマとして強く出したこと。自身の改善点をまとめることで，自分の問題として自覚が目覚めたことなども影響していると考えられる。
「プレゼンテーション研修のしおり」改訂について
- ・ 改訂版の案について一部修正の意見がある。その修正処理をしたものを教務課に提出願う。
- ・ 印刷は教務課にて実施する。
- ・ 配布は切田アドバイザーが各学部等の会議に出向き配布，その意義などを説明する。
- ・ その日程は各学部 F D 委員と切田アドバイザーとで調整する。
- ・ 15 年度のプレゼンテーション研修全日程（5 回）を年度始めから周知すること。

各学部の F D 活動の平成 14 年度報告

- ・ 省略

各学部の F D 活動の平成 15 年度計画

- ・ 省略

第 4 回・第 5 回プレゼンテーション研修会参加者について

- ・ 参加者の無い学科については至急教務課に連絡する。

喜多村先生の講演会について

- ・ 専任教員全員および職員は課長職以上の出席を依頼する。

専修大学全学 F D 委員会広報誌について（参考資料）

IDE「FDのヒント」について（参考資料）

本委員会の規程を15年度より施行する。（大学部長会で承認済み）

大学FD委員会予定について

- ・ 次回開催は、各委員と調整しての開催とする。

以上

参考資料 3 . F D 活動の推進 (「玉川大学の Faculty Development」)

F D 活動は教員自らの自発的な行動として行われなければその効果は期待できない。また、組織的・継続的な活動でなければ F D 本来の意味にならない。したがって、この F D 活動を教員個々に浸透させることと、さらなる推進をするために「パンフレット」の配布を実施することになった。

以下にその本文を掲載する。

大学教育の質的向上をめざす

玉川大学の Faculty Development

大学を取り巻く環境が激しく変化しているこのときに、玉川大学の教育理念を実現し、よりよく実践し、大学大衆化時代によりよく対応し、21世紀の玉川教育を支える教授団として持続的な成長を遂げ、結果的に競争優位性を玉川大学が確保することを目的に F D 活動を展開していきます。社会に受け入れられる教育の達成目標を明示し、これの達成度を評価できるようにすることが大切です。このようにしてはじめて、父母の付託に対する説明責任もまっとうできることとなります。F D 活動の実践や、大学の外部評価は今後どの大学も取り組まなければなりません。玉川大学では形だけのものではなく、実りあるものとして積極的にこれに取り組みます。

【1】玉川大学の教育改善活動の目的

玉川大学の教育を改善する目的は何なのか、基本的には、各学部単位、あるいは個々の教員が、置かれた状況に応じて考えていくことですが、例えば以下のようなことがあげられます。

学生が生き生きと勉学に励み、付加価値を高めて、自信を持って社会に出られる大学にすること
保護者が子供を預けてよかったと思う大学にすること
企業が学生を採用してよかったと思う大学にすること
卒業生が学べてよかったと誇りを持つ大学にすること
高校生が学びたいと思う大学にすること
社会が存在意義を高く評価する大学にすること
教員が熱意を持って学生に教育できる大学にすること

玉川大学はこのような大学になることを目指して改善活動を行います。

【2】F D 活動と従来からの改善活動の相違点

F D 活動は、社会の中で一般に行われている、Q C (Quality Control) 活動や I S O 認定、情報公開活動などと類似の改善活動です。玉川大学の中でも、様々な部処や教職員個々のレベルでは、すでに行われています。新学部の開設、新校舎の建設などのように大学全体として行っている改善活動もあります。事務部門も改善活動を推進中です。学部や学科を中心に行ってきたカリキュラムの改定、学科会での各種提案、個々の教員が日ごろ行っている改善活動なども広義には F D 活動のひとつです。今回の F D 活動の取り組みは、これらの活動を玉川大学の学部毎に、組織的・計画的・継続的に行おうというものです。特に重要なのは【3】節のように改善を目的とした向上のスパイラルを継続していくことです。

【3】FD活動に取り組む手順

FD活動を推進するための「組織」を作ります

学部単位、学科単位、各種委員会などにFD活動を推進する組織を作ります。この組織は、従来組織（例えば主任会など）が兼ねることも出来ます。個々の教員が担当科目の改善を行うこともFDです。また、この活動を実施するために、予算措置のしくみ、実施責任、組織のライン構成、他組織との協力関係などを明確にし、文書で記録します。

学部ごとに「学部のあるべき姿」を考えます

これを実現する為の「具体的な施策」を立案すると共に、の「達成時期」「達成度評価法」を予め決め、「計画書」を作成します

施策を実行します

達成目標時期になったら、あるべき姿が実現できたかを の「達成度評価法」を含め、総合的に検討し、「評価書」を作成します

実現できていない部分を取り出し、さらにあるべき姿に近づけるよう に戻ります

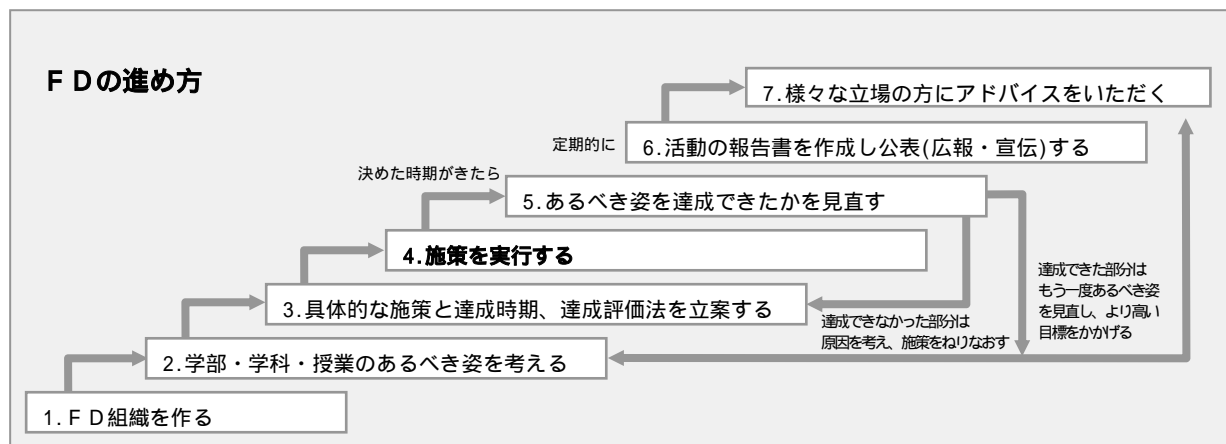
これによって、自分たちの努力が、本当にあるべき姿に近づいているのか、これからやらなければならないことは何か、などに気づくことができます。

「活動報告書」を定期的作成し、公表（広報、宣伝）します

公表することで、こんないい大学なのだ、こんなによい講義が受けられる、ということを通じて社会にアピールできます。また客観的なデータを示すことで、様々な人たちが組織から、よいアドバイスや、よい評価をいただくことができます。

様々な方に活動報告書や教育研究現場を見ていただき、アドバイスをさせていただきます

学生や保護者、企業、他大学や社会のFD経験者などから、我々が考えてきた「あるべき姿」や実施してきた施策、活動成果が、客観的に見て玉川大学を良くしているのか、もっと有効なアプローチがあるか、といったアドバイスをいただき、今後の活動に生かすことができます。



【4】FD活動による改善活動のメリット

玉川大学がよい大学になります（【1】が実現します）

無駄な努力や重複した努力、経費を省き、効果的な施策に重点的に取り組めます

教員が日頃、最も注力している教育改善活動の努力を、目に見える形にすることができます

参考事例や様々な立場の方のアドバイスを伺いながら、さらに改善を進めることができます

改善活動に対する予算措置や事務的な支援を受けることができます（研修会の開催、講師の費用、外部での研修参加など）

改善活動をみなが知ることができるので、知恵を出し合ったり学ぶことができます

改善の様子が目に見えてわかるので、楽しく改善活動がおこなえます

学生や保護者、企業などに、玉川大学の教育改善に向けた努力と、その成果を具体的に知っていただけます

【5】玉川大学のFD組織の構成

FD活動は各学部のことが一番よくわかっている学部毎に行うことを原則にします。FD活動組織がすでに来ている学部もあれば、これからの学部もあります。玉川大学では、平成14年度から、これらの活動支援や、

学部間の活動連絡を目的とした、大学FD委員会を設置しました。この委員会は、大学全体のFD啓蒙活動、コア科目の評価、教育方法研修会（プレゼンテーション研修会など）や教育方法講演会などの主催、大学全体のFD活動報告書の作成などをおこないます。

各学部のFD委員会	…学部毎に、学部FD委員会を構成します
大学FD委員会	…委員長（教学部長） 副委員長 委員（各学部の代表者：各1名、事務部門2名） アドバイザー 計12名

【6】当面の活動計画

全学におけるFD活動は、まだ始まったばかりです。当面は以下のような計画を進めたいと考えています。

平成14年	4月	大学FD委員会発足
平成14年	7月～	プレゼンテーション研修会開始、全学FD委員研修会実施（講演会なども計画中）
平成14年	10月	大学部長会：FDの基本方針ならびにその活動の推進の決定（予定）
平成15年	3月	全学FD报告会（各学部のあるべき姿、H15年度活動計画、H14年度活動報告、討論など）
平成15年	6月	全学FD報告書発行（予定）

これらの活動を通して、各学部のFD委員会の活動のあり方、大学FD委員会の活動のあり方などを検討し、実践的な組織作り、学部間の連携、他の会議体との連携、学内規定の整備などをおこなっていきます。



【資料1】 文部科学省はFDをこのように考えています

大学設置基準の一部を抜粋

第1章 総則

第2条 大学は、その教育研究水準の向上を図り、当該大学の目的及び社会的使命を達成するため、当該大学における教育研究活動等の状況について自ら点検及び評価を行い、その結果を公表するものとする。

2（省略）

3 大学は、第1項の点検及び評価の結果について、当該大学の職員以外の者による検証を行うよう努めなければならない。

（情報の積極的な提供）

第2条の2 大学は当該大学における教育研究活動等の状況について、刊行物への掲載その他広く周知を図ることができる方法によって積極的に情報を提供するものとする。

第6章 教育課程

（教育内容等の改善のための組織的な研修等）

第25条の2 大学は、当該大学の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究の実施に努めなければならない。

【資料2】 F D活動は歴史のある活動です

大学の自己点検関連の年表

1956年(昭和31年)	大学設置基準制定	
1958年(昭和33年)	技術士 国家試験開始	(科学技術庁)
1984年(昭和59年)	臨時教育審議会発足	(中曽根内閣：高度成長時代の終焉 新しい時代) (大学の自己評価に関する提言, 評価項目例示)
1989年(平成 元年)	ワシントン協定締結	(世界7カ国の技術士相互認定協定 米, 英など)
1990年(平成 2年)	大学審議会発足	(大学の自己評価に関する提言, 点検項目例示)
1991年(平成 1年)	大学審議会答申	(大学教育の改善について)
	大学設置基準改正	(大学の自己評価努力義務)
1997年(平成 9年)	大学審議会答申	(高等教育の一層の改善について) (平成12年度以降の高等教育の将来構想について)
1998年(平成10年)	大学審議会答申	(21世紀の大学像と今後の改革方針について)
1999年(平成11年)	大学設置基準改正	(大学の自己評価義務, 第三者による検証努力義務)
2000年(平成12年)	大学審議会答申	(グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について)
2001年(平成13年)	大学設置基準改正	(教員組織編制の弾力化, 教員資格の見直し, 遠隔授業の見直し)
2002年(平成14年)	日本技術者教育認定制度発足	
	中央教育審議会答申	(大学の質の保証に係る新たなシステムの構築について)

【資料3】 日本の大学でも多くの大学がF Dをおこなっています

文部科学省における調査結果 全国大学数651校 (2000年10月1日現在)

(1) 自己点検・評価の状況			
全大学での実施状況	596校	(651校中)	92%
(2) ファカルティ・ディベロップメント状況			
全大学での実施状況	341校	(651校中)	52%
ファカルティ・ディベロップメントの内容			
・新任教員研修会	116校	(651校中)	17%
・教員相互の授業参観	73校	(651校中)	11%
・センターの等の設置	46校	(651校中)	7%
(3) 学生による授業評価の状況			
全大学での実施状況	451校	(651大学中)	69%
評価結果は「学生の声」として意義があり, 再現性も高いとの合意が得られている			
各大学での実施状況例			
大学	開始年	実施状況	データの扱い
ICU	(' 50年代)	(50%程度, 170名)	(非公開)
立教大学	(' 85年)	(経済学部のみ, 上下3位)	(公開)
多摩大学	(' 91年)	(100%, 学生の声を聞く)	(統計結果のみ学内公開)
早稲田大	(' 92年)	(学生自治会が主催40%)	(公開)
東海大	(' 93年)	(全学 99% 89%)	(有志公開)
慶応SFC	(' 93年)	(全体 99% 80%)	(統計公開)
武蔵工大	(' 94年)	(有志10%)	(個人返却)
金沢工業大学	(' 95年)	(100%)	(教員名明示, 公開)
理科大	(' 96年)	(80%弱)	(個人返却)
宮城大学	(' 98年)	(100%, 学生の声を聞く)	(統計結果を学内公開)

【資料4】 大学審議会はF Dの活動例として以下のような提案をしています

大学審議会の答申から 大学の自己点検, 評価項目の例

(1) 教育理念・目標等	1-1: 大学(学部)の教育理念・目標の設定 1-2: 教育理念・目標の点検・見直し 1-3: 大学の将来構想 1-4: 教育研究の活性化・充実のためのこれまでの取り組み 他
(2) 教育活動 (学生の受け入れ)	2-1: 学生募集・入学者選抜の方針・方法 2-2: 学生定員充足状況(志望者数, 合格者数, 入学者数, 在学者数等) 2-3: 編入学の方針と状況 他

(学生生活への配慮)	2-4: 奨学金制度 (大学独自の奨学金, 企業等からの奨学金等), 授業料減免の状況 2-5: 学生生活相談 2-6: 課外活動 他
(カリキュラムの編成)	2-7: カリキュラムの編成方針と教育理念・目標との関係 2-8: 一般教育の内容とカリキュラム全体における位置付け 2-9: 外国語教育の内容とカリキュラム全体における位置付け 2-10: 保健体育の内容とカリキュラム全体における位置付け 2-11: 専門教育の内容とカリキュラム全体における位置付け 2-12: カリキュラムの編成及び見直しの方法・体制 他
(教育指導の在り方)	2-13: 各授業ごとの授業計画 (シラバス) の作成状況 2-14: カリキュラム・ガイダンスの実施状況 2-15: クラスの大きさ, 編成方法 2-16: 教員 1 人当たりの授業時間数 2-17: 各授業科目担当者間での授業内容の調整 2-18: 演習・実験等の実施状況 2-19: 視聴覚教育の実施状況 2-20: 他学科, 他学部聴講の方針と状況 2-21: 転学部, 転学科の方針と状況 2-22: 他大学との単位互換の方針と状況 2-23: 進級状況 (留年, 休学, 退学) 他
(教授方法の工夫・研究)	2-24: 教授方法の工夫・研究のための取り組み 2-25: 教員の教育活動に対する評価の工夫 (学生による授業評価等) 他
(成績評価, 単位認定)	2-26: 成績評価, 単位認定の在り方・基準 他
(卒業生の進路状況)	2-27: 卒業生の就職状況 2-28: 学部卒業生の大学院への進学状況 他
(3) 研究活動	3-1: 構成員による研究成果の発表状況 3-2: 研究誌の発行状況と編集方針 3-3: 共同研究の実施状況 3-4: 研究費の財源 (学外からの資金の導入状況, 科学研究費補助金の採択状況等) 3-5: 研究費の配分方法 3-6: 学会活動への参加状況 他
(4) 教員組織	4-1: 専任教員・非常勤講師の配置状況 4-2: 教育補助者, 研究補助者の配置状況 4-3: 出身大学の構成 4-4: 年齢構成 4-5: 採用, 昇進の手順・基準 4-6: 教員の兼職の方針と状況 4-7: 教員人事についての長期計画 他
(5) 施設設備	5-1: 施設設備の整備・運用状況 5-2: 図書館の利用状況 5-3: 学術情報システムの整備・活用状況 他
(6) 国際交流	6-1: 留学生の受け入れ状況 (受け入れ数, 奨学金, 宿舍等) 6-2: 在学生の海外留学・研修の方針と状況 6-3: 教員の学外研究の方針と状況 6-4: 海外からの研究者の招致状況 6-5: 海外の大学との交流協定の締結状況と活用状況 他
(7) 社会との連携	7-1: 公開講座の開設状況 7-2: 社会人の受け入れ (特別選抜制度, 特別の履修コース等) 7-3: 教員の学外活動状況 7-4: 学外の意見を教育研究に反映させるしくみ 他
(8) 管理運営, 財政	8-1: 教育研究に関する意志決定の方法・体制 8-2: 事務組織 8-3: 予算の編成と執行の方針と状況 8-4: 学外資金の導入状況 他
(9) 自己評価体制	9-1: 自己評価を行うための学内組織 9-2: 教育研究活動等の公表 9-3: 評価をフィードバックするためのしくみ 他

【資料 5】 F D の活動で中心になる教育改善施策には, このような提案があります

大学の理念・目標を紹介するワークショップ

ベテラン教員による新任教員への指導

教員の教育技法を改善するための支援プログラム (学習理論, 授業法, 講義法, 討論法, 学習評価法, 教育機器利用法)

カリキュラム改善プロジェクトへの助成

教育制度の理解 (学校教育法, 大学設置基準, 学則, 学習規則, 単位制度, 学習指導制度)

アセスメント (学生による授業評価, 同僚教員による教授法評価, 教員の諸活動の定期的評価)

【資料6】 玉川大学におけるFD活動の実施例(まだ組織的・継続的でないものも含んでいる)

学部のあり方の検討(学部長を中心として)

- 1-1: 就職サポートの充実 …… > 就職サポートルームの開設
- 1-2: 教員の努力を顕彰 …… > 表彰制度(研究広報活動, 安全活動, FD活動などを表彰)
- 1-3: 教員の教育活動支援 …… > 科目の改善提案(10万円, 数件/年)
- 1-4: 教員の研究活動推奨施策 …… > 学科をまたがる共同研究支援(100万円, 2件/年), TuTLO活動推奨, 各種補助金の紹介, 応募の促進, 共同研究, 若手研究助成, 紀要の発行, 学術研究所の共同研究募集, 業績報告書, 情報学研究所への報告・公表, 外から見える研究成果の創出, ホームページの充実
- 1-5: 学部の改善活動推進 …… > 主任の担当化(就職担当, 広報担当など)
- 1-6: 学生の声を学部改善に反映する …… > 投書箱の設置(提案箱)
- 1-7: 学部設備の改善提案 …… > 設備整備計画に提案(教室のIT化, 黒板ワイド化, 教室への時計の設置, 渡り廊下の設置, 小教室への据え置きマイクの設置, 全学共通の教室棟の建設など)
- 1-8: 広報活動 …… > 学部展, 収穫祭, テクノフェスタ, 夏休みロボット教室, 出張講義開催,
- 1-9: 学生の活性化 …… > ソーラーカー競技への参加, 各種競技会, 資格試験の紹介・指導・参加推奨

学科のあり方の検討(学科を中心として)

- 2-1: わかり易いカリキュラム …… > カリキュラムの改正, シラバスの見直し
- 2-2: 委員会活動 …… > 授業改善委員会, 授業運営委員会, 学科運営委員会
- 2-3: IT的講義手法の模索 …… > Net対応の講義開講(Net Prep, e-learning)教育用PCソフトの活用
- 2-4: 最先端技術を学生に紹介する講義や実験・演習のあり方 …… > 夏休み「特別講義」開講, 夏季研修での企業見学
- 3-1: 1年生の専門家意識の高揚 …… > 1年生への少人数ゼミ
- 3-2: わかり易い科目選択制度 …… > コース制の導入
- 3-3: 学生の声を授業改善に反映する …… > 学生による授業評価アンケートの実施(報告書発行)
- 3-4: 実技関連科目の運営方法 …… > 個人レッスンからグループワークへの転換, コースに合わせた実験の細分化
- 3-5: 学生の自主性を推奨する科目 …… > プロジェクト研究, 特別課題研究,
- 3-6: 講義教材, 資料の閲覧促進 …… > 教科書の出版, インターネット(講義毎のホームページ, e-learning)
- 3-7: 学生に達成度自己評価させる …… > インターネットを利用した演習問題への取り組み, 講義毎のミニテスト
- 3-8: 学生に予習復習の習慣をつける …… > 宿題を出し添削する, 図書館に同一の本をたくさん置く, 図書館の利用時間の延長
- 3-9: きめの細かい指導 …… > 補習授業, メールなどによる質疑応答
- 3-10: 高校の履修科目のばらつき是正 …… > 数学や物理・化学などの基礎科目の開講数を増やしレベルを細分化する
- 3-11: 教授法の講習 …… > 研修会, 講習会, (PCソフトウェア使用法, IT機器使用法なども含む)

研究室のあり方の検討(研究室や学科を中心として)

- 4-1: 研究室の活性化 …… > 研究室間の交流・合同発表会, 企業との技術交流, 研究委託, 先輩との交流, 学会・研究会での発表, 論文投稿, 展示会での発表, 共同研究, TuTLO, ホームページ充実
 - 4-2: 外部資金の導入
事務部門との連携 …… > 科学研究費(申請, 採択状況), 学内研究助成菌, 委託研究, 研究奨励金,
 - 5-1: 就職 …… > 就職会社の拡大, 資格取得支援, 各種コンテスト・競技会参加支援,
 - 5-2: アドバイス …… > メンタル・履修・進路相談, 担任・学生センター・アドバイザーの連携, 混成チーム
 - 5-3: 学生への案内の一元化の …… > ネットによる履修登録, 休講通知, 各種質問, 授業評価, 休講通知(学生個人への)
 - 5-4: 伝票処理 …… > 伝票決済のオンライン化, 権限委譲(承認数の削減)
 - 5-5: FD提案 …… > 各種教育設備の新規導入, 更改提案, 混成チーム, 提案制度の改善
- ### 全人教育のあり方の検討
- 6-1: 労作の精神を生かす課題 …… > 湘南海岸の清掃作業, 町田市の清掃作業
 - 6-2: 講話を体系的に構築
FD委員会活動 …… > 真善美聖の主題に基づく講話スケジュール作成と講師の選定
 - 7-1: FD活動の奨励 …… > FD活動の周知, FD活動推進方法の検討, 外部情勢の調査広報
 - 7-2: FD活動の推進 …… > FD研修会, 講演会の実施, 各部処データの取りまとめ, 報告書作成
 - 7-3: FD活動サポート …… > 教員のためのFD研修室の整備, ニュースの発行, 業績報告書の作成と公表
 - 7-4: 教育改善活動を活発化する …… > 教育改善活動論文集の発行, 他大学の改善活動実施例講演会, プレゼン研修会開催

【資料7】 F D関連図書・資料

- [1] " 大学評価とは何か " 喜多村和之 東信堂 1992年
大学審議会特別委員,財団法人大学基準協会の大学自己評価調査研究活動などを通して長年大学改革を考え続けてきた著者の集大成。アメリカのアクレディテーションやセルフスタディーの例,大学審議会の答申,大学設置基準など豊富に資料が紹介されている。
- [2] " 大学・短大の自己点検・評価 " 青木宗也 エイデル研究所 1992年
著者は法政大学総長,神奈川大学副理事,日本私立大学団体連合会教育改革委員会委員長,大学基準協会副会長などの要職を勤める,大学改革のキーパーソンである。本書は,平成4年に大学基準協会から刊行された「大学の自己点検・評価の手引き」を纏めてきた著者が,「手引き」でかききれなかったことを纏めたものである。特にアメリカにおける「自己点検」の実情紹介がくわしい。
- [3] " 東海大学教育研究年報(1997年度) " 東海大学 (1998)
東海大学における,教育研究活動の客観的事実を広く社会に報告する資料集。教員一人当たりの平均授業時間数や学生数,学生に夜授業評価結果概要,学位取得状況,入試状況,就職状況,大学の財政概要など,東海大学の全てを知ることが出来る貴重な資料である。
- [4] " 1997年度学生による授業評価 事例報告 " 東海大学教育研究所 (1998)
東海大学では毎年1000以上の講義について「学生による授業評価」が実施されているが,そのうち教員が公表を同意した400件について,評価結果を掲載している。数字のデータ,棒グラフ,教員のコメントなどが1ページに1件ずつ掲載されており,講義の雰囲気を知ることができる。これは,学生にも公開されており,また学内からはインターネットで見ることが出来る。
- [5] " 1997年7月度多摩大学ボイス(学生の声)調査報告概要 " 多摩大学ボイス担当委員
多摩大学における,1990年から99年までの学生による授業評価の総合報告である。多摩大学では96年から本データを学生に公開している。
- [6] " 慶応湘南藤沢キャンパスの挑戦 " 加藤寛 東洋経済新報社
政府税制調査会会長,SFCの建学に携わり,総合政策学部の学部長を勤める著者の,建学部の考えが述べられている。工業社会から脱した今,大学ごとに多様な教育を提案していく必要があること,将来社会を想定して,そこで活躍するためには,どのような教育が必要かを説いている。言語教育と情報教育,キャンパスの設計,学生による授業評価などさまざまな提言がある。
- [7] " 大学教育研究の課題 " 一般教育学会編 玉川大学出版部 (1997)
大学教育に関する50の論文が紹介されている。また,全国57の大学において現在進められている改革,およびその実施組織に関する報告を収録している。
- [8] " 授業を変えれば大学は変わる " 安岡高志 プレジデント社 (1999)
東海大学での学生による授業評価」を立ち上げた筆者が,その経験と,問題点をまとめた書。
- [9] " 大学教授法 " 森田保男 大槻博 PHP研究所 (1995)
大手食品メーカーなどで長年マーケティングに携わってきた著者が,顧客ニーズ把握のプロとして,1991年より多摩大学で行っている「学生による授業評価」の報告。教員の反応や,説得法,データの解釈法など,詳細な考察が行われている。
- [10] " 第2回SFCキャンパスライフ満足度調査報告書1998 " 慶応義塾大学出版会
1993年と1998年におけるSFCにおける,学生の満足度調査結果。上記出版会から市販されている。講義,ゼミだけでなく,事務室,食堂,クラブ活動,電子メールなど,学生が大学でどのような項目に満足するのか,不満をもつのが統計的に示されている。他大学との比較,「学生による授業評価」の総合評価の年次経緯などのデータもある。
- [11] " 大学自己評価の出発点 1991年全国調査の結果から " 広島大学大学教育研究センター
広島大学 大学教育研究センターが1991年に全国の大学に対して行ったアンケート調査結果をまとめたもの。大学における自己評価組織が当時において,どの程度行われていたか,報告書などはどのようなものが出ているか,などが述べられている。
- [12] " 1996年度 学生意識調査報告書 " " 1997年度 学生意識調査報告書 " " 1998年度 学生意識調査報告書 " " 1999年度 学生意識調査報告書 " 玉川大学・玉川学園女子短期大学
玉川大学における1996年から99年までの学生意識調査報告書。
- [13] " k - 16 指定統計調査2001 " " k - 16 教育研究調査2001 " " 自己点検・評価報告書2000 "

玉川学園教育研究活動等点検調査委員会

玉川学園における自己点検調査報告書

[14] 工学部FD報告書 (2000年春)(2001年春)(2002年春) 玉川大学工学部「学生による授業
評価報告」 1,(2000年秋)2,(2001年春)3,(2001年秋) 自己点検ニュースNo.1~No.15

玉川大学工学部で実施された学生による授業評価報告書と自己点検活動の広報誌



参考資料 4 . プレゼンテーション研修アンケート用紙

各項目ごとに A ~ E でランクをつけてください。

その際、A は「全くそのとおり」、E は「全くそのとおりでない」という評価です。

1 . 全体についての感想をお聞かせください	A	B	C	D	E	フリーコメント
・総合的に満足されていますか						
・担当する授業に役立つと思いますか						
・ご自身のプレゼンテーション・スキルは 向上したと思いますか						

2 . 研修会の内容についてお聞かせください

・研修内容は適切でしたか (2 日間という時間制約を考慮に入れてお答えください)						
・講師の説明は理解しやすかったですか						
・テキスト、教材、教具などは適切でしたか						

3 . 研修会の運営についてお聞かせください

・2 日間という日程は適切ですか (不適切な場合は、フリーコメントをご記入ください)						
・時間配分は適切ですか (不適切な場合は、フリーコメントをご記入ください)						
・開催場所、施設などは適切でしたか						
・事務手続き、連絡などは適切でしたか						

4 . 今後の F D 研修会についてお聞かせください

・この研修の開催を継続することに賛成ですか						
・この研修の受講を、他の人にも勧めますか						
・どんな内容の研修会を希望しますか (複数記入可)						

5 . 具体的な技法について、裏面にお書きください。

6 . その他の感想、コメントなどありましたら、別紙に自由にお書きください。

今後の F D 研修会開催および運営の参考資料とさせていただきます。

参考資料 5 . 各学部における F D 活動についての実態調査

(平成 14 年 5 月 31 日現在)

項 目	文 学 部
大学 F D 委員会 各学部会の委員構成	(国際言語文化学科)藤田裕二(大学 F D 委員) , (人間学科)大竹信子 (2 名)
1. 学生による授業評価 への取り組み	<実施している> 平成 11 年度に外国語学科で実施し, 報告書を Web で公開, 冊子を講師室に置いて閲覧可能にした。 平成 14 年度の春学期に国際言語文化学科 1 年生を対象に第 1 回目の授業評価アンケートを実施する予定。現在その原案を作成中。
2. 教授法(教授法, 学 業評価法, 教育機器利 用法等)研修への取 り組み	<実施している> メディア教育開発センターで行っている研修講座への参加を呼びかけている。 フランス語コースでは年に 1 度, 非常勤講師を交えて「フラン語教育を考える会」を開き, 授業実践, 教授法などの研究報告を行っている。
3. 授業の改善(工夫)へ の取り組み	<実施している> 国際言語文化学科では, 授業改善のために二つの部会, 学科運営委員会と授業運営委員会を設置し, 月 1 回の会議の中で, アンケート調査など授業改善のための様々な議論を行っている。
4. 新任の専任教員に対 する大学の理念, 学部・ 学科の教育目標, 成績 評価方法等についての オリエンテーションの 実施	<実施している> 採用時の説明, 印刷物の配布(全学部), 及びコース会議などで説明するなどして実施している。
5. 非常勤講師に対する 大学の理念, 学部・学科 の教育目標, 成績評価 方法等についてのオリ エンテーションの実施	<実施している> 採用時, 年度末, 年度始めに特別に会議を開催し, その中で行っている。
6. シラバスの検証	<実施している> 上述の授業運営委員会で, 各授業間のシラバスの調整などを行っている。
7. その他の取り組み	

項目	農学部
大学FD委員会 各学部会の委員構成 (下線は座長等)	松香光夫(大学FD委員), 農学研究科長, (生物資源学科)小野正人, 田淵俊人 (応用生物化学科)堀 浩, 八並一寿 <div style="text-align: right;">(6名)</div>
1. 学生による授業評価 への取り組み	<実施している> 平成13年度秋 semester 末に協力してもらえる教員を対象に行った。 平成14年度からはアンケート調査を行って、もう少し広げる予定。
2. 教授法(教授法, 学 業評価法, 教育機器利 用法等)研修への取り 組み	<実施の予定> 全学FD研修に参加する。
3. 授業の改善(工夫)へ の取り組み	<検討中> FD委員会農学部会の取り扱い事項としている。
4. 新任の専任教員に対 する大学の理念, 学部・ 学科の教育目標, 成績 評価方法等についての オリエンテーションの 実施	<実施している> 学部長が行っている。
5. 非常勤講師に対する 大学の理念, 学部・学科 の教育目標, 成績評価 方法等についてのオリ エンテーションの実施	<実施していない> 特になし。全学の体制に合わせる。
6. シラバスの検証	<検討中> FD委員会農学部会の取り扱い事項としている。
7. その他の取り組み	学部ホームページ上で、「Web 学習」の取り組みを始めた。これは、農学部基礎科目と しての生物学, 化学の基礎学力確保に通じることを目的として、「生物学」, 「化学」, 「有 機化学」の講義内容が、学生に解かるようにしたものである。 現在まで「生物学 A」, 「生物学 B」が制作されている。

項目	工学部
大学FD委員会 各学部会の委員構成 (下線は座長等)	山本庸介(大学FD委員), (機械)春日幸生, (電子)菅野直敏, (情報)山崎浩一, (経営)野渡正博, (共通)小林和彦 (6名)
1. 学生による授業評価 への取り組み	<実施している> 平成 11 年より検討を開始, アンケートのフォーム作成, 実施方法検討, 教員や学生との意見交換, 周知などを行った。 平成 12 年の秋学期より試行実験を実施し, 平成 13 年の春, 秋学期を合わせて 3 回実施済みである。平成 14 年度からは, 本実施に入る予定で準備を進めている。 3 回目の参加人数は 51 名, 参加科目数 110 科目など, 次第に定着しつつある。
2. 教授法(教授法, 学 業評価法, 教育機器利 用法等)研修への取 り組み	<実施している> 平成 12 年 3 月 FD 研修会で, 教育方法改善部会から, 特色ある教授法としてコミックを用いた視覚型, 学生授業参加型, 講義演習併用型, 質問用紙型などを紹介した。 教育改善のための機器として, マルチメディア教室の設置, マイクロフォンの全教室 設置, セミナーの設置を提案。 学習の進度に従って履修するようにフローチャートの徹底, 先習科目の徹底など学生 指導の改善を目指す。 等の案が出され幾つかは実現している。
3. 授業の改善(工夫)へ の取り組み	<実施している> 平成 11 年より教育方法改善検討委員会を設置。1 年生の学力調査, 教室の教育設備の 改善などをおこなっている。新入生に対する基礎学力テストして, 数学・英語・国語の試 験を行った。数学テストは国際比較が出来る問題を使用し工学部生の学力の判定を行っ た。「学生意識調査」も行い学生の大学への期待の程度から, 授業の改善を図ることが 出来ないか検討した(平成 13 年 FD 研修会)。基礎科目, 専門科目の 1/3 科目減を 13-14 年度から行い, 重要科目のみの履修を目指している。
4. 新任の専任教員に対 する大学の理念, 学部・ 学科の教育目標, 成績 評価方法等についての オリエンテーションの 実施	<実施している> 新任教員に対しては, 工学部長, 学科主任などによって, オリエンテーションを行っ ている。また小原先生のご著作を紹介して, 自習していただけるようにしている。

<p>5. 非常勤講師に対する 大学の理念，学部・学科 の教育目標，成績評価 方法等についてのオリ エンテーションの実施</p>	<p><実施している> 学内の担当教員から大学の理念，学部・学科の教育目標，成績評価方法等についてのオリエンテーションを行っている。</p>
<p>6. シラバスの検証</p>	<p><実施している> 毎年，更改をするなど，充実に努めている。</p>
<p>7. その他の取り組み</p>	<p>平成 11 年度より，工学部全体の行事として，毎年春休みに F D 検討会を行っている。ここでは，工学部長による，工学部の現状と今後の改革方針，4 学科の現状と今後の改革方針，自己点検委員会，授業方法改善委員会の活動報告，その他のディスカッション（たとえば，教員の評価方法など）などを行っている。</p> <p>授業方法改善部会では，学習面の改善をソフトの改善，教室の施設・機器の改善をハードの改善として多くの提案を行い，実行可能などは実現に努力し，予算面からすぐには実現出来ないことは時間をかけて改善を目指すように求めた。</p> <p>平成 11 年より 13 年まで，自己点検委員会と教育方法改善委員会が常設され，各々，活動を行ってきた。自己点検委員会では，「学生による授業評価」「自己点検ニュースの発行」「学生の提案箱 Student Voice の設置」「提案の実現例パネル展示会」などの活動を行った。</p> <p>教育方法改善委員会では「1 年生の基礎学力調査」「教室の施設改善提案」，「学生の学力に見合う授業の提案」，「特色ある授業の実例報告」などを行った。</p> <p>平成 14 年からは，自己点検委員会に一本化され，大学 F D との連携のもとで，活動を行ってゆく予定である。現在活動方針を策定中。</p> <p>提案制度の制定（工学部）</p> <p>授業改善提案制度： 授業を改善するために，必要な機器がある場合，提案することによって，10 万円程度の支援を受けることができる制度（平成 13 年度より開始）</p> <p>共同研究提案制度： 学科をまたがる共同研究を提案し，100 万円程度の支援を受けることができる制度（平成 14 年度より）</p> <p>学生の学習相談のため「数学の学習相談」「物理学チューター」制度を設けた。</p> <p>工学部の学生の空き時間有効活用のため「工学部コミュニケーションサイト」を設け映画による英語のヒヤリング，インターネットの自由使用などが出来るようにした。</p>

7. その他の取り組み	<p>工学部カリキュラムの改定</p> <p>つねにカリキュラムの見直しを行っているが、平成 12 年度からコース制と 1 年生に対する少人数ゼミを全学科で取り入れたカリキュラムを検討し、平成 14 年度から実施している。</p> <p>高等学校において理数の習得が不十分な学生のため「数学基礎」「物理学基礎」としてリメディアル科目を 1 年生対象に開講している。</p> <p>中高における「理科離れ」を大学で補うためコア に「生活と科学」「実践の物理学」など文系学生が興味を持てる科目を開講している。「科学史」では、講義形式でなくインターネット・VTR・実験を通じて科学に興味をもてるような授業も試みている。</p> <p>その他</p> <p>1:「テクノフェスタ」研究室公開、各種催しの開催により、工学部の活性化をめざして活動している。(平成 9 年度より)</p> <p>平成 14 年度は工学部 40 周年を記念して、さらに活動を活発化する。</p> <p>2:「特別課題研究」: 学生が学びたいことを自ら提案し、研究できる科目の創設(平成 10 年より)、ソーラーカーレース、環境とリサイクル活動などにより、工学部の活性化を図っている。</p>
-------------	---

項目	経営学部
大学FD委員会 各学部会の委員構成 (下線は座長等)	永田清,古島義雄,芦澤成光,二宮智子,大藤正,菊池重雄(大学FD委員),小林幸夫, 等松春夫,大金エセル(9名)
1. 学生による授業評価 への取り組み	<実施している> 「イングリッシュ・コミュニケーション ～ (必修選択)」のすべての授業において、 平成 13 年度より実施している。評価結果は英語科目担当の専任教員が管理し、非常勤 教員担当分も含めて、授業改善のための基礎資料としている。 平成 14 年度以降、プレゼンテーション講習を終了した教員から実施予定(教員個々 の管理)。全教員の講習終了後、学部として組織的に行う方向(成績評価の学部管理) で検討中。
2. 教授法(教授法,学 業評価法,教育機器利 用法等)研修への取り 組み	<実施している> 学部内のFD会議で,専任教員による,授業方法に関するプレゼンテーションを実施 (本年度春学期) 平成 12 年度より,PC を中心とした教育機器利用講習会(PC ソフトウェア講習会も含む) を適宜開催。FD委員会のプレゼンテーション講習に全教員が参加する方向で検討中。
3. 授業の改善(工夫)へ の取り組み	<実施している> 全専任教員が対面授業にラーニング・スペース等の教育用 PC ソフトウェアを併用し、 授業効果を高めている。 一部のゼミにとどまるが,合同ゼミ等を企画し,多角的・複眼的視点からのゼミ授業 運営に努めている。
4. 新任の専任教員に対 する大学の理念,学部・ 学科の教育目標,成績 評価方法等についての オリエンテーションの 実施	<実施している> 平成 13 年度の学部開設にあたり,全新任教員に対して,標題の説明会を開催した。 今後も実施の予定。
5. 非常勤講師に対する 大学の理念,学部・学科 の教育目標,成績評価 方法等についてのオリ エンテーションの実施	<実施している> 平成 13 年度の学部開設にあたり,全新任兼任教員・非常勤教員に対して,標題の説明 会を開催した。「イングリッシュ・コミュニケーション ～ (必修選択)」担当の全教 員に対して,年一回(毎年 3 月),授業方法および成績評価方法の確認会を実施してい る。
6. シラバスの検証	<実施している> 新年度が始まる前に,教務主任が全科目のシラバス内容をチェックしている。
7. その他の取り組み	毎月FD会議(教育分野と研究分野の隔月開催)を開催し,授業改善および研究能力 の向上に努めている。

項 目	教 育 学 部
大学FD委員会 各学部会の委員構成 (下線は座長等)	学部長， 学科主任，教務主任，学生主任， 教務担当(内，佐藤隆之副担当(大学FD委員))，教職担当 <div style="text-align: right;">(11名)</div>
1. 学生による授業評価 への取り組み	<検討中> 学科会にて今後の課題となっていることを報告した。また，これに関する文献も紹介した。
2. 教授法（教授法，学 業評価法，教育機器利 用法等）研修への取り 組み	<実施している> 領域別に個別に取り組んでいる。
3. 授業の改善(工夫)へ の取り組み	<実施している> 領域別に個別に取り組んでいる。また，これに関する文献も紹介した。
4. 新任の専任教員に対 する大学の理念，学部・ 学科の教育目標，成績 評価方法等についての オリエンテーションの 実施	<実施している> 適宜行っている。
5. 非常勤講師に対する 大学の理念，学部・学科 の教育目標，成績評価 方法等についてのオリ エンテーションの実施	<実施している> 適宜行っている。
6. シラバスの検証	<検討中> 教務・教職担当者会の懸案事項として今後検討していく予定。
7. その他の取り組み	

項 目	芸 術 学 部
大学 F D 委員会 各学部会の委員構成 (下線は座長等)	< 検討中 > <u>学部長</u> , 学科主任 , 林卓行 (大学 F D 委員) (4 名)
1. 学生による授業評価 への取り組み	< 実施の予定 > 芸術学部新設科目に関して , 春学期終了時に行うことが決定されている。
2. 教授法 (教授法 , 学 業評価法 , 教育機器利 用法等) 研修への取り 組み	< 実施している > 学部開設にあたってすでに昨年より主要教員を英米の芸術系カレッジに研修派遣。こ れに関して今後も毎年継続の予定。
3. 授業の改善 (工夫) へ の取り組み	< 実施している > すでに学部開設検討委員会にて実施。実技関連科目では個人レッスン形式からグルー プ・ワークへの転換。教材の共通化。到達目標の設定。
4. 新任の専任教員に対 する大学の理念 , 学部・ 学科の教育目標 , 成績 評価方法等についての オリエンテーションの 実施	< 実施の予定 > 行う予定はあるが , 現在では新任の採用が発生していない。
5. 非常勤講師に対する 大学の理念 , 学部・学科 の教育目標 , 成績評価 方法等についてのオリ エンテーションの実施	< 実施している > 大学の理念 , 学部・学科の教育目標 , 成績評価方法などについて共通理解をもつべく オリエンテーションを行っている。
6. シラバスの検証	< 実施している > 教務主任が全シラバスをチェック。不備がある場合には該当教員に指摘し , 変更を依 頼している。
7. その他の取り組み	教授法研修への取り組みにも関連するが , 学部共同研究費を F D に使うことを決定し ている。 例) 専任教員の海外派遣。年 2 名程度。外国人教員の招聘 (学部を F D の観点から視察 していただく。いずれの場合もその成果は報告書としてまとめる。 各教員レベルでの取り組みに関しては , 一定の共通フォーマットを用意 , それをまと めて報告書として作成する。 学生が有するスキルに関して , 授業とは別枠に精査。(英語 , コンピュータ)

項 目	女子短期大学
大学FD委員会 各学部会の委員構成 (下線は座長等)	短大部長, 科主任, 教務主任(大学FD委員), 教務担当 (5名)
1. 学生による授業評価 への取り組み	<実施している> 平成 13 年度は学生生活全般を対象に問題項目を抽出することを目的として, 全学生に項目別自由記述方式のアンケート調査を実施した。その中には授業評価に関する項目が含まれているので, 平成 14 年度はこの調査に基づき項目を設定して授業評価を実施する予定である。科目別では総合演習やコンピュータ関連科目など部分的に実施している。
2. 教授法(教授法, 学 業評価法, 教育機器利 用法等)研修への取り 組み	<実施している> コンピュータ, デジタルカメラ, プロジェクターなどの操作方法や利用の説明会及びネットワーク環境を利用した授業の説明会を実施している。また, 学科全員(教員と学生)が同じネットワークに参加して, 教育機器やネットワーク利用の長所短所を学生と共に学ぶ機会を授業に導入している。しかし, 体系的な教授法や学業評価法の研修は実施していないので実施を検討している。
3. 授業の改善(工夫)へ の取り組み	<実施している> 学科の全教員が関わる科目(総合演習)については, 改善を議題とした会議の開催と当該科目を題材とした論文作成や学会発表を通じて実施しているが, その他の科目については各担当者に委ねられている。
4. 新任の専任教員に対 する大学の理念, 学部・ 学科の教育目標, 成績 評価方法等についての オリエンテーションの 実施	<実施している> 部長及び主任が口頭で説明すると共に関連資料を渡しているが, 状況に応じて実施する必要性を感じている。
5. 非常勤講師に対する 大学の理念, 学部・学科 の教育目標, 成績評価 方法等についてのオリ エンテーションの実施	<実施している> 新規採用時に実施しているが, 他学部にも所属する専任教員や他学部ですでに採用されている非常勤講師を対象には実施はしていない。しかし, 状況に応じて実施する必要性は感じている。
6. シラバスの検証	<実施していない> 短大FD委員会でシラバス検証の基準を検討して検証を実施する。
7. その他の取り組み	平成 15 年度短大FD委員会を設置して, 新学科での展開を想定した個人の能力(教授法など)に的を絞った活動を計画中である。

参考資料 6 . 各学部における F D 活動についての実態調査用紙

平成 14 年 5 月 28 日

大学 F D 委員会委員
各 位

大学 F D 委員会委員長
後 藤 昌 彦

各学部における F D 活動の現状について（調査）

平成 14 年 5 月 9 日に開催の第 1 回大学 F D 委員会におきまして、学部としての F D 活動の現状を把握することになりました。

つきましては、別途調査用紙を添付しましたので、下記の要領にて、ご協力のほどお願いいたします。学部単位での回答となりますので学部内にて充分ご協議の上、回答の作成をお願いします。

また、いただきました調査回答を一覧としてとりまとめ、次回の本委員会資料とする予定でありますので、ご了承願います。

記

1. 提出様式

添付の記入様式(ワード)に入力の上、メールに添付して返送願います。

学生による授業評価への取り組みについて
教授技法（教授法、学業評価法、教育機器利用法等）研修への取り組みについて
授業の改善（工夫）への取り組みについて
新任の専任教員に対する大学の理念、学部・学科の教育目標、成績評価方法等についてのオリエンテーションの実施について
非常勤講師に対する大学の理念、学部・学科の教育目標、成績評価方法等についてのオリエンテーションの実施について
シラバスの検証について
前述の 1～6 に該当しない、その他の取り組みについて（どんな取り組みでも結構です）

2. 回答送付先

学校調査課 齊藤宛 e-mail: fsaitou@eve.tamagawa.ac.jp

3. 回答期日

平成 14 年 6 月 10 日（月）までにご提出願います。

ご不明な点についてのお問い合わせは、学校調査課（齊藤 内 8898）まで。

以上

学部におけるFD活動状況の調査（回答）

該当の欄に を付してください。

平成 14 年 5 月 31 日現在

1. 学生による授業評価への取り組みについて	
すでにしている	
(具体的に) 以降の予定も含めて	
検討中である	
(具体的に)	
行っていない	
(今後の予定)	
2. 教授技法（教授法，学業評価法，教育機器利用法等）研修への取り組みについて	
すでにしている	
(具体的に) 以降の予定も含めて	
検討中である	
(具体的に)	
行っていない	
(今後の予定)	

該当の欄に を付してください。

平成 14 年 5 月 31 日現在

3. 授業の改善（工夫）への取り組みについて	
すでに行っている	
(具体的に) 以降の予定も含めて	
検討中である	
(具体的に)	
行っていない	
(今後の予定)	
4. 新任の専任教員に対する大学の理念，学部・学科の教育目標，成績評価方法等についてのオリエンテーションの実施について	
すでに行っている	
(具体的に) 以降の予定も含めて	
検討中である	
(具体的に)	
行っていない	
(今後の予定)	

該当の欄に を付してください。

平成 14 年 5 月 31 日現在

5 . 非常勤講師に対する大学の理念 , 学部・学科の教育目標 , 成績評価方法等についてのオリエンテーションの実施について

	すでに行っている	
(具体的に)	以降の予定も含めて	
	検討中である	
(具体的に)		
	行っていない	
(今後の予定)		

6 . シラバスの検証について

	すでに行っている	
(具体的に)	以降の予定も含めて	
	検討中である	
(具体的に)		
	行っていない	
(今後の予定)		

平成 14 年 5 月 31 日現在

7 . 前述の 1 ~ 6 に該当しない , その他の取り組みについて (どの取り組みでも結構です)

平成14年度 玉川大学 FD 委員会委員

委員長	教学部長	後藤昌彦
副委員長	農学部	松香光夫
委員	文学部	藤田裕二
委員	工学部	山本庸介
委員	経営学部	菊池重雄
委員	教育学部	佐藤隆之
委員	芸術学部	林卓行
委員	女子短期大学	中村慎一
アドバイザー	学術研究所	切田節子
事務担当	教学部	稲葉興己
事務担当	教育調査企画部	齊藤文則

2003年5月発行

発行 大学FD委員会（玉川大学・玉川学園女子短期大学）

〒194-8610 東京都町田市玉川学園6-1-1

tel : 042-739-8802（教学部教務課）

042-739-8899（教育調査企画部学校調査課）